

ウィリアムズ症候群の家族を対象とした 生涯発達支援プログラムの構築

Building a Lifelong Developmental Support Program
for Families with Williams Syndrome

根 津 知佳子 NEZU Chikako
(日本女子大学家政学部児童学科教授)

和 田 直 人 WADA Naoto
(日本女子大学家政学部児童学科教授)

安 藤 朗 子 ANDO Akiko
(日本女子大学家政学部児童学科准教授)

甲 斐 聖 子 KAI Seiko
(日本女子大学家政学部児童学科助教)

吉 澤 一 弥 YOSHIZAWA Kazuya
(日本女子大学名誉教授)

目 次

はじめに	根津知佳子
I 「音楽の森」が象徴するもの	根津知佳子
II 「音楽の森」チラシデザイン	和田 直人
III ウィリアムズ症候群のきょうだいについての一考察： インタビュー調査から	安藤 朗子
IV 絵本『なみ』を「成長」をキーワードに読み解く試み	甲斐 聖子
V ウィリアムズの活動における概念形成のプロセス —胚細胞研究における予備的考察—	吉澤 一弥
VI 実践複合体としてのキャンプの可能性と課題	根津知佳子・吉澤 一弥

はじめに

根津知佳子

本研究課題80「ウィリアムズ症候群の家族を対象とした生涯発達支援プログラムの構築」は、研究課題69（2018年度～2019年度）「ウィリアムズ症候群の視空間認知の特性の研究～主として投影法心理検査を用いた解析～」および、研究課題76（2021年度～2022年度）「ウィリアムズ症候群のための“支援プログラム”の開発～投影法心理検査を基盤として～」の成果を基にした研究である。

さらに研究全体を俯瞰するならば、この一連の3課題は、ウィリアムズ症候群を対象とした筆者らの実践研究の第3期の研究に該当する（表1右枠）。

表1 実践研究における本研究課題の位置づけ

2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023
音楽キャンプ 創設期（第1期）								家族支援としての音楽キャンプ 確立期（第2期）								活動モデル形成期（第3期）						
																	日本女子大学総合研究所研究課題					
																	研究課題69	研究課題76	研究課題80			

時間芸術である音楽を軸とした活動を文字化することは困難であるが、本稿のⅠとⅡでは、実践現場のニーズに則って開催している「音楽の森」のポスターデザインを通してウィリアムズ症候群の患児・者や家族支援がどのように変容したかを概観する。具体的には、音楽キャンプ創設期（第1期）および家族支援としての音楽キャンプの確立期（第2期）に関するⅠを根津が担当し、活動モデル形成期（第3期）のポスターデザインに関するⅡを和田が担当する。

続くⅢでは、ウィリアムズ症候群のきょうだいを対象としたインタビューについて安藤が報告する。筆者らの実践では、ウィリアムズ症候群だけではなく保護者やきょうだい、そしてスタッフも能動的に活動することが特徴である。きょうだいグループのダイナミクスもまた音楽キャンプには欠かせないものである。音楽キャンプに長く継続して参加しているきょうだい3名のウィリアムズ症候群（同胞）との関係や家族関係についての考察を行う。

Ⅳでは、家族支援のためのプログラムとして開発した「絵本を介した創造的音楽活動（デジタル化）」に関して、「成長」をキーワードに素材となった絵本の物質的構造や物語のプロットの整理、作者の活動歴や絵本観を示した上で、プログラムの成果物である5つの作品について考察を行う。

Ⅴでは、課題80の学際的な意義について活動理論の視座で吉澤が論じる。多様なレベルのスタッフを含むキャンパーによる長期間にわたる活動であり、協働による創造的プロセスやダイナミズムを可視化するために活動理論の概念形成と胚細胞に着目して考察する。

最後に、Ⅵでは「実践複合体」としてのキャンプの可能性と課題について、吉澤と根津がまとめる。

ウィリアムズ症候群におけるライフステージ全体を視野に入れた発達支援方法の開発は、ウィリアムズ症候群のみならず教育・療育・保育・養育などに独創的かつ、学際的なプログラムを提供できることを展望している。この融合的共同研究のスタイルは、総合研究所の（４）日本女子大学を拠点とする学際的な共同研究・調査に該当する。

尚、本研究は、三重大学教育学部松本金矢教授と藤女子大学人間生活学部川見夕貴講師との協働である。

I 「音楽の森」が象徴するもの

根津知佳子

ウィリアムズ症候群（以下、ウィリアムズと表記する）は、染色体異常に起因する小児科領域の難治疾患である。ウィリアムズの特徴として、軽度の発達の遅れ、音楽への親和性の高さ、人懐っこさ、視空間認知力の弱さなどが挙げられるが、本研究課題は、ウィリアムズの生涯発達支援を展望し、これらの特性に対して多角的にアプローチすることを目指している。

インターネット等の普及に伴い、近年ではウィリアムズの行動特徴（摂食／睡眠障害、感覚／運動障害、認知障害、行動情動障害等）に関する情報を誰もが入手可能であるが、その情報発信や情報交流を「キャンプ」が担っていた時代がある¹⁾。筆者らは、ウィリアムズのための活動が治療的枠組みの緩い「キャンプ」という形態として先進国でボトムアップ的に発展したことについて、独自の背景によるものとして捉えている。「キャンプ」という形態での短期集中的な活動の展開を可能にしているのは、初対面であっても誰とでも活動ができるというウィリアムズの言語能力と社交性によるものである。このことは、臨床経験のないボランティアによるサポートを可能にしているだけでなく、それらのグループと専門性の高い臨床職とによるグループダイナミクスを創出することを可能にしている。このような背景から、筆者らは「実践的複合体」という位置づけにより芸術療法の一手法としての音楽キャンプを行っている²⁾。

我が国におけるウィリアムズを対象とした音楽キャンプは、米国の音楽キャンプを視察した患児の父親による依頼を受け、2001年に高等教育機関の協働によって開始されたという独自性を持っている。以降、2023年8月までに2歳から33歳までの患児・者40名（のべ240名）、45家族（のべ468名）を対象とし音楽キャンプ22回と情報交換会を兼ねた活動を13回実施している（表1）。

表1 音楽キャンプの開催状況

音楽キャンプ	情報交換会	参加者数	参加家族数	スタッフ数
22回	13回	45名（2～32歳） のべ240名	のべ406名	397名

この音楽キャンプの歴史は、先行研究や諸外国の音楽キャンプの視察を基盤とした創設期（2001年から2008年度）、家族支援としての音楽キャンプの確立期（2009年から2016年度）、そして、ウィリアムズの課題に焦点を当てた活動モデル形成期（2017年から2023年度）に分類できる。総合研究所の研究課題69、76、および本研究課題80は、3期目の活動モデル形成期に該当する。

本稿では、音楽キャンプを補填する位置づけとして不定期に行われている情報交換会および音楽会である「音楽の森」の歴史を遡り、生涯発達支援の変容を概観する。

1-1. 第1期（2001年～2008年度）「自然の中で自然体になる」

吉澤ら（2020）で報告したように³⁾、患児・者のためのプログラムを開発していた第1期は、教

員養成における学生教育を軸としたため、大学教員がリサーチャー、コーディネーター、スーパーバイザー、ファシリテーターのすべての役割を担っていた（図1上枠内）。

総合モデル（2009）

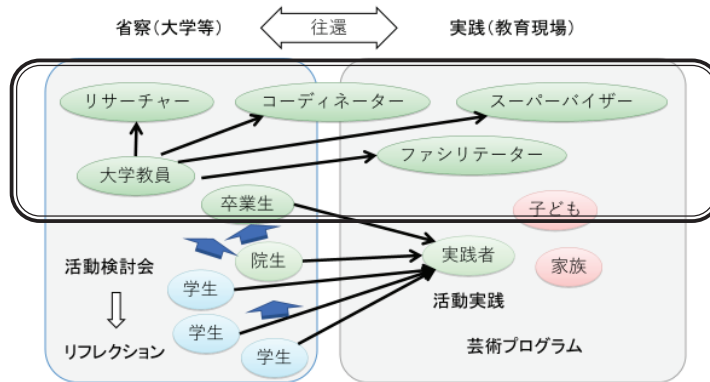


図1 第1期の取り組みモデル⁴⁾

特に第1期は、米国やアイルランドの先駆的なキャンプの視察と並行しながらプログラムを創出する段階であったため、国内外の関係者や家族が意見交流を行うことができる研究会の設定が不可欠となり、2008年3月に第1回「音楽の森」を順天堂大学で開催する運びとなった。



図2 音楽の森（2008）

ウィリアムズを「音楽嗜好症（ミュージコフィリア）」の一例とした脳神経科医の Oliver Sacks (1933-2015) は、1995年に音楽キャンプを視察するために初めてベルボア・テラスを訪れた時の様子を次のように述べている⁵⁾。

ウィリアムズ症候群患者は異常なほど音楽に深くかかわっていた。音楽はたんに彼らの生活のとても深く充実した要素であるだけではなく、あらゆるところに存在している。ほとんどの人が一日の大半、食堂まで歩いているときでさえも、歌を口ずさんでいたり、楽器を弾いたりしている。……一人のキャンパーが音楽活動をしている別のキャンパーやそのグループに出会うと……すぐに参加するか、音楽に合わせて楽しそうに体を揺らす。……これほど夢中になる音楽との関わりは、健常者にはめずらしい。……プロの音楽家のあいだにも、この種の完全な没頭はめったに見受けられない(原文ママ)。

2002年と2003年にベルボア・テラスの音楽キャンプに参加した筆者も、まさにオリヴァー・サックスと同じ印象を抱いたことから、「音楽の森」のタイトルは、筆者の体感したマサチューセッツ州のベルボア・テラスの「自然の中で自然体になること」というイメージを表している。しかし、その後、2004年と2006年に参加したミシガン州におけるキャンプでは、主宰者が替わり参加者の年齢層が下がったこともあり、ベルボア・テラスの雰囲気とは異なる印象を抱くことになる。また、我が国における筆者らの実践においても、ベルボア・テラスは異なる印象を抱くようになっていった。「自然の中で自然体になること」を可能にしていたのは、ベルボア・テラスの音楽キャンプに参加していた青年期の各々のキャンパーが絶対音感の保持者だったことと、一定水準以上の楽器演奏の技能を習得していたという特別な集団であったということになる。

1993年に第7染色体の微細欠失であることが判明してから、とりわけ音楽的能力に着目する研究や報道が一人歩きする傾向にあり、その関心はもっぱら絶対音感に向けられていた。もちろん、オリヴァー・サックスも、ウィリアムズの誰もが天才ではなく、誰もが音楽の才能に恵まれているわけではなく、むしろその言語性の高さの割には他のことができないことが他者に理解されにくい傾向にあることも著書内で強調している⁶⁾。

では、どのようにしたらベルボア・テラスのキャンプのように一人ひとりが「自然の中で自然体になること」ができるのであろうか。ウィリアムズの成長に伴って、どのような支援をしたらよいのだろうか。このような問題意識が第1回「音楽の森」実施の背景となっている。

筆者らは、第1回「音楽の森」に米国のウィリアムズ症候群協会のテリー・モンカバ氏（母親）とベン・モンカバ（息子）を招聘し、当時20代前半だったベン氏のライフヒストリーを共有した。講演会終了後に、我が国の乳幼児から成人期のウィリアムズの32組の家族から次のような質問が提出された（表2）。日常的な「こまり感」は、発達段階によって異なるものもあれば、共通しているものもあり、多岐にわたっていることがわかる。

第1回「音楽の森」に遡る2年前の2006年に開催されたパトリシア・ハウリン氏による「Williams 症候群の行動特性と支援～ゆたかな成人期をめざして～」においても「日中活動の場が限られている」「交友関係は豊かとはいえない」などの調査結果が報告され⁷⁾、研究者がようやく教育関係者とウィリアムズの日常的な支援の在り方を共有し始めるようになった。

表2 参加者からの質問

発達段階	内容	質問内容
乳幼児期	音過敏	・ 5歳男児：掃除機が特に苦手ですいつも泣いている。音に対する対処法は、慣れる事しかないか。
	問題行動	・ 3歳男児：同じ年頃、あるいは年下の子に対して攻撃的（爪を立てる、足でけるなど）で困っている。幼少期にはこのようなことがあるのか。次第にやめるようになるのか。
	音楽	・ 3歳男児：音楽をやらせたいが、いつから、どのようなことを始めたらよいのか。
学齢期	医学	・ 心臓に問題が無く生まれたが、循環器について10歳までに発症するといわれている。
	生活	・ 中2・14歳女児：大人になると、公共機関を使って出かけるようになると思うが、親が不安を感じている。
	進路	・ どのような校種の学校に通ったか。 ・ 中2・14歳男児：普通科に通っているが、今後の進路（高校）に悩んでいる。 ・ アメリカには、ウィリアムズ症候群の子が特別な教育を受けられる学校や機関があるか。
	問題行動	・ 具体的に、どのような教育や訓練を受けるか？ ・ 普通の学校で普通に勉強している子の方が多いか？
		・ いじめにあったり、本人がいじめをしたり、ということがあうか。その場合、どのように対処するべきか。
成人期	支援	・ 18歳女子（次女）：ウィリアムズ症候群と解ったのはとても遅く、高1の12月でした。我が子（次女）がおちこんでいる時、母親として何をしてあげるのがBestか？
	活動	・ WSAでは、成人WSの活動では、どのようなものがあるか？ ・ 19歳：学齢期が終わり、4月から社会人。これから仲間づくりや趣味を広げていくにはどのような組織やサークルがあるか？又、どのような所に相談に行けばよいのか？
		・ 睡眠に障害はあるか？遅くまで起きているとか、朝が早い、昼寝をよくするなど…夢は良く見るのか？
	医学	・ 耳が悪くなると聴いたが、中耳炎になりやすいか？
	支援	・ 薬を使うことが有効という説があるが、具体的にどんな薬なのか？ ・ 不安はどうやったら克服できるのか？ ・ ウィリアムズ症候群を患ったことで今までつらかったことは何か？ ・ 車の運転はできるか？ ・ 楽しいことは何か？つらい事は何か？ドキドキする事は何か？
その他	音楽 キャンプ	・ 音楽的才能とはどんなことか？ ・ 海外のキャンプは日本から参加するといくらくらいか？ ・ Music campの費用はどのくらいですか？ ・ アメリカのキャンプに参加するには、どのようなことを経て行けばよいのか？ ・ 英語がはなせなくても大丈夫か？
	生活 連携	・ 日本の難しい漢字を絵かき歌（リズムにのって）と色を使って覚えた。 ・ WSAとして、行政側や医療側に働きかけて行っているものに、どのようなものがあるか。

1-2. 音楽キャンプ確立期（2001年～2016年度） ひまわりがシンボルに

第1回の「音楽の森」における情報交換を通して、ウィリアムズだけではなく保護者やきょうだいも活動主体とする「家族支援としての音楽キャンプ」の意義を見出すことができた。

2011年に開催した第2回「音楽の森」では、東日本大震災の被災地で音楽家として活動しているウィリアムズをゲストとして招聘しただけではなく、ゲストプレイヤーによる会場参加型のプログラムとウィリアムズと家族等によるパフォーマンスを取り入れたプログラムを構成し、最終日に大学の講堂で開催するようになった（図3）。このスタイルは、2013年、2014年、2015年、2016年に引き継がれていき、宿舎となった大学の附属施設（ひまわりの家）が参加者のシンボルになっていった。卒業生のデザインしたチラシも、第3回目から第6回まで、ひまわりが用いられている。



図3 第2回音楽の森（2011）



図4 第3回音楽の森（2013）



図5 第4回音楽の森（2014）



図6 第5回音楽の森 (2015)



図7 第6回音楽の森 (2016)

表3にあるように、第1期では、開催地や宿泊施設の安定した確保が困難であったが、2013年より大学の附属特別支援学校の訓練施設である「ひまわりの家」の使用が認められ、名実ともに寝食を共にするキャンプ開催が可能になり、保護者（通称：おやじ・おふくろの会）が食事やバーベキューを担当しながらダンスやコーラスの練習をすることが慣例化されていった。最終日に、収容定員千名を越える大学の講堂の舞台でキャンプの成果を披露するという流れも安定していった。

太陽に向かって咲くひまわりは「笑顔で堂々とした生活を送りたい」という願いを象徴しているだけではなく、共に生活する空間・場を象徴するようになっていった。この頃から、徐々に一人ひとりが自律した社会参加をするための支援を展望することが求められてきたことから、「音楽の森」は、しっかりと大地に根をはる樹の集合体をイメージした活動に変容していった。それが第3期に引き継がれている。次章では、第3期の「音楽の森」をチラシデザインの見地で報告する。

参考文献

- 1) 根津知佳子・吉澤一弥・和田直人・角藤比呂志「ウィリアムズ症候群の視空間認知とパフォーマンス」『日本芸術療法学会誌』第51巻2号（日本芸術療法学会 2021年3月）44-53頁。
- 2) 根津知佳子・榊眸・圓道衣舞・安部剛・松本金矢「実践複合体としての音楽的場—Williams Syndromeの芸術プログラムにおける『ホイサー』の事例から—」『音楽心理学音楽療法研究年報』第34巻（日本音楽心理学音楽療法懇話会2006年3月）、23-30頁。
- 3) 吉澤一弥・根津知佳子・和田直人「ウィリアムズ症候群の視空間認知特性の研究—主として投影法心理検査を用いた解析—」『日本女子大学総合研究所紀要』23巻（日本女子大学総合研究所2021年3月）、148頁。
- 4) 前掲論文 根津知佳子担当5.「協働の変容」、161頁 図7を転載（一部加筆）。
- 5) オリヴァー・サックス著、太田直子訳『音楽嗜好症（ミュージコフィリア）脳神経科医と音楽に憑かれた人々』（早川書房2014年）、477頁。Olier Sacks (2008). *Musophilia Tales of Music and the Brain* Alfred A. Knopf, Publisher, New York.
- 6) 前掲書、468-469頁。
- 7) 京都大学大学院医学研究科公開特別授業「Williams 症候群の行動特性と支援～ゆたかな成人期をめざして～」パトリシア・ハウリン講演会資料。

表3 音楽キャンプの開催場所

	開催期間	活動場所
プレキャンプ	2002年	江の島 浮遊空間 虎丸座
第1回	2002年	河口湖 民宿さんすい
第2回	2003年	教育学部音楽棟、ひまわりの家
第3回	2004年	教育学部音楽棟、ひまわりの家
第4回	2005年	高田本山、堀坂山の家、教育学部音楽棟
第5回	2006年	涼風荘、堀坂山の家、教育学部音楽棟、三翠ホール
第6回	2007年	いずみ湖研修の家（長野県諏訪市）
第7回	2008年	入野谷（長野県伊那市）
第8回	2009年	入野谷（長野県伊那市）
第9回	2010年	美杉ビレッジ（三重県美杉村）
第10回	2011年	高田青少年会館、教育学部、三翠ホール
第11回	2012年	アグリーブルむかわ（山梨県北杜市）
第12回	2013年	ひまわりの家、三翠ホール
第13回	2014年	ひまわりの家、三翠ホール
第14回	2015年	ひまわりの家、三翠ホール
第15回	2016年	ひまわりの家、三翠ホール
第16回	2017年	根本荘（神奈川県三浦海岸）
第17回	2018年	広瀬屋（山梨県小菅村）
第18回	2019年	マリーナ河芸
第19回	2020年	マリーナ河芸（Zoom による）
第20回	2021年	マリーナ河芸・日本女子大学（Zoom による）
第21回	2022年	マリーナ河芸・日本女子大学（Zoom による）
第22回	2023年	マリーナ河芸

Ⅱ 「音楽の森」 チラシデザイン

和田 直人

筆者は、ウィリアムズ症候群の患児・者と家族を対象とした支援プログラム「音楽の森」のチラシデザインを2019年3月の「音楽の森7」から2024年3月の「音楽の森11」まで計5回に渡って制作した。ここでは、そのチラシデザインがどのような思考過程からデザインされたものかについて概説したい。

これまでに筆者たちは、ウィリアムズの本質的特性である視空間認知の実態解明を行なうなかで、ウィリアムズが空間を認識する際に「奥行き知覚」の手がかりとされる「相対的な大きさ」「重なり」「線遠近法」「空気遠近法」「きめの勾配」「陰影や濃淡」などの情報収集を苦手としているのではないかという推察のもとに研究を進めてきた。実は、生涯発達支援プログラム「音楽の森」のチラシデザインにも、これらの観点が盛り込まれており、デザイン構成画面はいたってシンプルで奥行き知覚情報を必要としない平面的デザインとなっている。デザイン発想のヒントとなったのは、20世紀を代表するオランダの画家ピエト・モンドリアン（Piet Mondrian 1872～1944）の具象絵画から抽象絵画へ移行する際の造形的思考の過程である。筆者は「音楽の森」の森という言葉から木を連想し、モンドリアンが「木」を題材にして具象表現から抽象表現へと展開していった過程に着目しながら、その造形的思考をチラシデザインへと応用することを試みた。

1-1. 自然界の形態を抽象化

モンドリアンは、自然界の形態を抽象化したことで知られているが、20世紀に起こった美術・デザイン運動「デ・スタイル」の理念に基づく純粋な幾何学的抽象表現に至る過程の中で、特に「木」の表現を重要なテーマとして扱っている。彼の「木」を題材とした作品は、自然から抽象へと変容するプロセスを象徴しており、モンドリアンが木をどのように抽象化していったのか、そしてその過程がデ・スタイルの造形運動とどのように関連しているかを以下に詳述する。

【初期の木の描写】

モンドリアンの初期の作品には、自然主義的な風景画が多く見られる。この時期の彼の木の描写は、ルネサンス以降の伝統的な絵画技法が用いられており、木の枝や葉の形態を詳細に描き出している。これらの作品には、自然の複雑さと有機的な形態が忠実に再現されている。

【キュビズムの影響】

1900年代初頭、モンドリアンはパリに移住し、キュビズムに影響を受ける。この影響を受けて、彼の作品は徐々に抽象的になり始めていく。キュビズムは、物体を幾何学的な形に分解し、多視点から同時に描く手法を特徴としており、モンドリアンはこのキュビズムの手法を取り入れ、木の形態を直線や曲線に分解し、複数の視点から再構成する表現を試みている。

【木の抽象化の過程】

モンドリアンは、木の複雑な形態をシンプルな線と面に還元することで、抽象化を進めた。例え



図1 『夜、赤い木』(1908)



図2 『ジンジャーポットのある静物Ⅱ』(1912)

ば、図3の『灰色の木』(1912年)や図4の『花咲くリンゴの木』(1912年)などの作品では、木の幹や枝を幾何学的なラインと面に変換し、構図全体を調和の取れた形に再構成している。これらの作品において、モンドリアンは色彩を抑えながら、グレーや茶色を中心に使用することで、形態そのものの表現に集中していることが見て取れる。

【デ・スタイルとの関わり】

デ・スタイル (De Stijl) の創始者の一人であるモンドリアンは、1917年にこの運動に参加している。デ・スタイルは、芸術、建築、デザインにおける統一された美学を追求し、純粋な抽象と秩序を目指した造形運動である。図7の『Composition with Red, Yellow, Blue and Black』(1921年)のように、水平と垂直のライン、そして赤、青、黄色の三原色と無彩色を使用したシンプルで幾何学的な形態で表現するのがこの運動の特徴である。

【木の抽象化とネオ・プラスティシズム】

モンドリアンの木の抽象化は、彼の「ネオ・プラスティシズム (新造形主義)」の理論へと進化している。ネオ・プラスティシズムとは、自然の形態を超えて、純粋な抽象表現を追求するもので、水平と垂直のライン、そして三原色を基礎としている。モンドリアンは、自然の木の形態を水平と垂直のラインに還元することで、普遍的な美の原理を探求した。例えば、図4の『花咲くリンゴの木』(1912年)や図6の『Composition No.10 (埠頭と大洋)』(1915年)のような作品では、自然の形態が完全に幾何学的なラインと面に変換され、構成されている。これらの表現から、モンドリアンは自然形態に内在する秩序と調和を抽出することで、視覚的なシンボルへと昇華することに成功したのである。

モンドリアンは、自然界の木の形態を抽象化する過程で、デ・スタイルの理念に基づく純粋な幾何学的抽象表現を確立した。彼の作品は、自然主義的な描写から始まり、キュビズムの影響を経て、最終的には水平と垂直のラインと三原色を用いたネオ・プラスティシズムに至るまでの進化を遂げている(図8)。このプロセスは、デ・スタイルの理念と密接に関連しており、自然の形態を抽象的な秩序と調和に還元する試みとして、美術史における重要な位置を占めている。モンドリアンの木の抽象化は、デ・スタイルの理論と実践の具体例であり、現代の抽象芸術の基盤となる視覚的な



図3 『灰色の木』(1912)



図4 『花咲くリンゴの木』(1912)

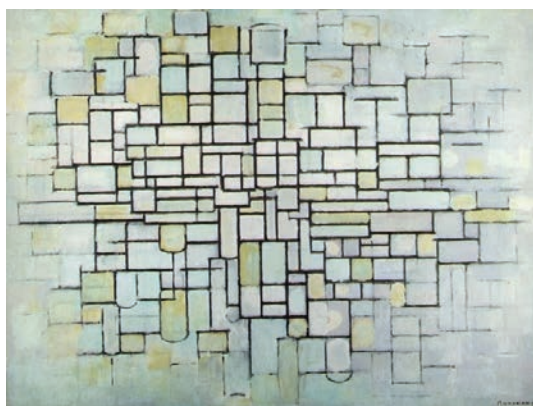


図5 『Composition II』(1913)



図6 『Composition No.10 (埠頭と大洋)』(1915)

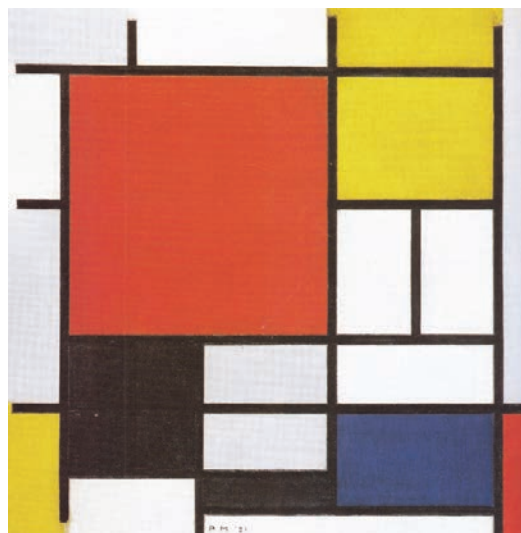


図7 『Composition with Red, Yellow, Blue and Black』(1921)

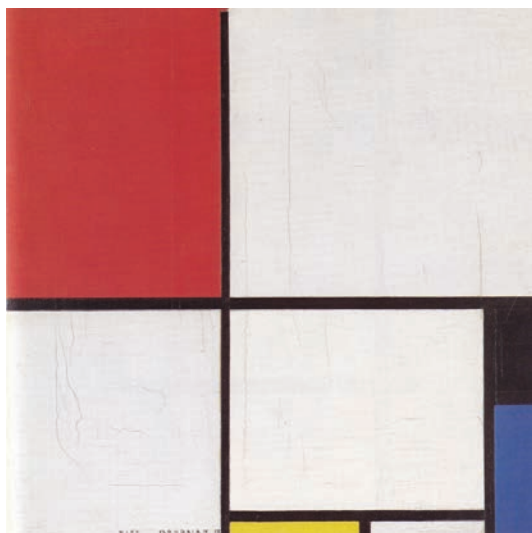


図8 『Composition with Red, Yellow and Blue』(1928)

言語を確立したといえる。

次にモンドリアンの造形的思考に密接に関わったデ・スタイルについて概説したい。

1-2. デ・スタイル (De Stijl)

デ・スタイル (De Stijl) は、1917年にオランダで創始された美術・デザイン運動で、20世紀初頭のアートとデザインに大きな影響を与えた。この運動は、芸術と社会の統合を目指しながら、純粋な抽象芸術の形態を探究した。デ・スタイルは、シンプルで幾何学的な形態と、限られた色彩の使用を特徴としており、この運動に深く関わった主要な人物として、ピエト・モンドリアンとヘリット・リートフェルトが挙げられる。

【モンドリアン (Piet Mondrian)】

モンドリアン (1872~1944) は、デ・スタイル運動の中心的な画家であり理論家としても知られている。彼は初期には印象派の影響を強く受けていたが、やがてパブロ・ピカソとジョルジュ・ブラックによって創始され、多くの追隨者を生んだ現代美術の大きな動向であるキュビズムに触発され、抽象芸術の道へと転向した。モンドリアンは、自然の形態を超えた純粋な抽象表現を追求しながら、独自の「ネオ・プラスティシズム (新造形主義)」理論を構築した。彼の作品は、水平線と垂直線を基礎としており、赤、青、黄の原色を用いた幾何学的な構成が特徴となっている。

【リートフェルト (Gerrit Rietveld)】

ヘリット・リートフェルト (1888~1964) は、デ・スタイル運動を代表する建築家であり、家具デザイナーとしても知られた。彼の最も有名な作品は、『Red and Blue Armchair (赤と青の椅子)』で、この作品はデ・スタイルの理念を具現化したものである。リートフェルトは、シンプルで機能的なデザインを追求し、伝統的な装飾を排することで、純粋な形態と色彩による表現を重視した。リートフェルトのデザインは、モンドリアンの絵画と同様に、水平と垂直のラインと原色の使用に特徴がある。

【水平と垂直】

デ・スタイル運動の重要な要素である水平と垂直のラインは、安定性と秩序を象徴している。モンドリアンは、自然界の混沌と対比して、純粋な秩序と調和を表現するために、この構成を用いた。モンドリアンの理論によれば、水平と垂直のラインは、動と静、男性と女性、内と外などの二元的な対立を象徴しており、これらの要素が調和することで普遍的な美を生み出すと考えた。水平と垂直のラインを基本としたシンプルな構成は、リートフェルトの建築や家具デザインにも応用され、デ・スタイル運動の基本的な美学を形成したといえる。

【赤、青、黄の3原色】

デ・スタイル運動では、色彩も非常に重要な役割を果たしたといえる。モンドリアンとリートフェルトは、赤、青、黄の三原色を中心に据えながら、これらの有彩色と無彩色の黒、白、グレーと組み合わせて使用した。三原色は、純粋で強い色彩表現を可能にし、視覚的な明快さとエネルギーをもたらしている。モンドリアンは、色彩が形態とともに純粋な美的価値を持つものと考えており、絵画においては色面を厳密に分割し、バランスを追求した。一方、リートフェルトは、家具

や建築において、これらの色を構造的な要素として用いることで、シンプルかつ機能的なデザインを実現している。

デ・スタイル運動は、20世紀のアートとデザインに深い影響を与え、抽象芸術と機能主義の発展に寄与したといえる。モンドリアンとリートフェルトの革新的な作品は、デ・スタイルの理念を具現化し、水平と垂直のライン、三原色の使用によって純粋な抽象表現を追求した点に最大の特徴がある。彼らの作品は、シンプルでミニマルな表現でありながら深い美的価値を持ち、現代のデザインや建築にその影響を多大に残したと考えられる。

1-3. シンプルな表現とミニマルな表現

シンプルな表現、ミニマルな表現は、芸術、デザイン、建築など様々な分野で重要な位置を占めている。これらの表現は、余計な装飾や詳細を排除しながら、必要最小限の要素によって構成されることを特徴としている。このアプローチは、視覚的な美しさだけでなく、機能性やメッセージの明確さを追求する点において注目できる。以下に、シンプルな表現とミニマルな表現の特性について考察した。

【シンプルな表現の特性】

1. 明瞭さと明快さ

シンプルな表現は、視覚的に明瞭であり、観る者にとって理解しやすい特徴がある。情報が過剰に詰め込まれていないため、メッセージが一目で伝わるという大きな利点がある。たとえば、交通標識やピクトグラムなどはシンプルなデザインにすることによって、情報を迅速かつ正確に伝えることができる。

2. 美しさの追求

シンプルなデザインは、その無駄のない美しさによって評価される。無駄を削ぎ落とすことで、形状や色彩の本質が際立ち、視覚的なバランスを整えることができる。このため、多くのデザイナーはシンプルな形状や配色を好む。ル・コルビュジエ（Le Corbusier 1887～1965 本名シャルル・エドゥアール・ジャンヌレ）の建築や、ジョナサン・アイブ（Sir Jonathan Paul Ive 1967～）のアップル製品のデザインがその好例といえる。

3. 機能性の重視

シンプルなデザインは機能性を重視する。複雑な装飾を排除することで、使いやすさや効率性が向上するといえる。例えば、インターフェースデザインにおいては、ユーザーが直感的に操作できるよう、無駄な要素を取り除くことが重要となる。これにより、ユーザーエクスペリエンスが向上することで、製品の魅力が増すといえる。

【ミニマルな表現の特性】

1. 最小限の要素で最大限の効果

ミニマルな表現は、必要最小限の要素だけを使用して最大効果を生み出すことを目指している。これは、視覚的な要素だけでなく、空間や音楽などの他の表現方法にも適用される。ミニマル・

アートでは、単純な形状や限られた色彩を用いることで、観る者に強い印象を与えることができる。

2. 余白の活用

ミニマルなデザインでは、余白（ネガティブスペース）の活用が重要となる。余白を適切に使うことにより、主要な要素を際立たせながら、視覚的なバランスを保たせることが可能となる。これにより、デザイン全体に一種の静寂感や調和が生み出される。たとえば、日本の伝統的な美学である「間」や、禅の庭園デザインなどは余白の美しさを巧みに利用したものとして挙げられる。

3. 省略の美学

ミニマルな表現は、省略の美学ともいえる。不要な要素を排除することで、本質的な部分だけを残し、対象の本質を際立たせることができる。この美学は、造形分野だけではなく詩や文学においても見られる。俳句や短歌は、限られた言葉数で深い意味や感情を表現する典型的な例といえよう。

【シンプルな表現とミニマルな表現の共通点と相違点】

シンプルな表現とミニマルな表現には多くの共通点があるが、微妙な違いも存在する。どちらも余計な要素を排除し、明瞭さと美しさを追求しているが、ミニマルな表現はさらに徹底的に要素を削ぎ落とし、本質だけを残そうとする点において異なる。シンプルな表現は、機能性や実用性を重視する一方で、ミニマルな表現は、純粋な美的価値や哲学的な探求を重視することが多いため、アート性がより強い表現といえる。

シンプルな表現とミニマルな表現は、現代のデザインや芸術において重要な役割を果たしている。これらのアプローチは、明瞭さ、美しさ、機能性を追求することで、観る者へ強い印象を与えている。それぞれの特性を理解して、適切に応用することによって、より効果的な表現を実現することができる。シンプルな表現やミニマルな表現は、情報過多の現代社会において、デザイン手法および造形手法として、特にその価値を発揮する表現方法と考えられる。

1-4. 「音楽の森」チラシデザインへの展開

モンドリアンは、単なるアーティストに留まらず、思想家でもあった。モンドリアンの芸術作品は、彼自身の哲学的・美学的理論と深く結びついており、彼の著作『新造形主義』（*De Nieuwe Beelding*：1925）において、自らの造形理論を詳述していることから窺える。それらの造形理論が実際の作品制作に直結しているのが彼の大きな特徴の一つともいえる。

モンドリアンは新たな空間を創造することを目指し、これまで歴史的に培われてきた表現手法や経験から解放された「純粋な構造における意識」の具現化を試みた。色彩学では、赤のような暖色系の色は進出色、青のような寒色系の色は後退色として扱われる。しかし、モンドリアンが色分けした面は、前進と後退、あるいは前景と背景といった奥行き意識は全く暗示しておらず、純粋に平面的な幾何学を構成することだけを求めている。モンドリアンの後年の作品は、色彩を極力控えながらシンプルなラインによる水平・垂直の意識がより強く反映された円熟の域に達した作品が多く残されている（図9～図10）。

モンドリアンの造形表現の特徴とされる「水平・垂直のライン」を用いたコンポジションの均衡によって、支援プログラム「音楽の森」のチラシデザインの制作を試みた。モンドリアンの作品で

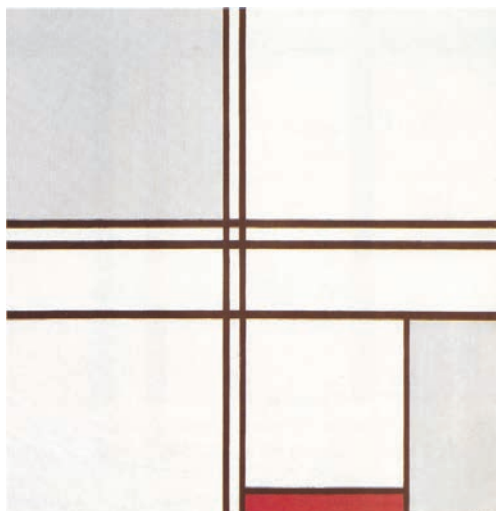


図9 『Composition with Red and Grey』(1935)

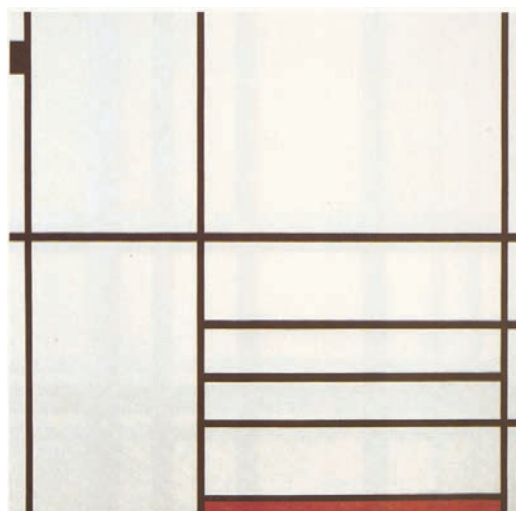


図10 『Composition with Red and Black』(1936)

は、「水平・垂直のライン」によって各要素が均衡を保つように配置されている。これは、動的平衡 (Dynamic Equilibrium) と呼ばれるもので、全体のバランスが絶えず保たれるような配置を指している。この動的平衡を意識したコンポジションによるデザイン構成をするにあたり、出版社の絵本広告チラシ制作 (図11) へ、その手法をまず取り入れてみた。そのチラシデザインの視覚的効果を検証した後、ウィリアムズの支援プログラム「音楽の森」のチラシデザイン (図12) へ展開を試みた。

『ウィリアムズ症候群の視空間認知特性の研究～主として投影法心理検査を用いた解析～』(日本



図11 絵本の広告チラシ (2018)



図12 音楽の森7のチラシ (2019)

女子大学総合研究所紀要第23号)において、ウィリアムズの絵画表現では、ものの重なり認識、奥行き感と立体感の統合認識、透視図法的な空間認識などが、ウィリアムズの描いた風景画から読み取ることができなかったことを報告した。絵画空間表現においてポイントとなる「相対的な大きさ」「重なり」「線遠近法」「空気遠近法」「きめの勾配」「陰影や濃淡」の描画手法(図13)が、ウィリアムズの絵画には、ほとんど確認できなかった。これらのことから、奥行き描画手法を排除したモンドリアンの「水平・垂直のライン」による「純粋な構造における意識」に基づいたチラシ表現は、ウィリアムズの視覚認識にも優しく受け入れられると考えた。



図13 3次元空間表現に用いられる描画手法

モンドリアンに強い影響を与えたキュビズム(立体派:Cubisme)は、ルネッサンス以降の単一焦点による遠近法を放棄することによって、形態をバランスよく平面的に表現して抽象表現の世界を広げたことが知られている。つまり、それまで当たり前とされていた表現手法「ボリューム感」や「奥行き感」「前景と背景」というものをあえて画面に表現せずに新たな視覚実験を推し進めたのである。このことから、奥行き感を排除したモンドリアンの「純粋な構造における意識」による画面構成は、ウィリアムズの視空間認知特性に合致した表現方法であると筆者は考えたのである。

2019年12月に行われた「音楽の森8」では、水平・垂直のラインに円形の曲線も取り入れてみた(図14)。デ・スタイルの美学は、極めてシンプルで幾何学的な要素に基づくものである。水平と垂直の直線が支配的に存在しており、これらの線は規則的な配置によって構成され、三原色(赤、青、黄)とホワイト、ブラックなどのモノクロームな色彩が用いられているのが特徴である。この抽象的なアプローチは、形態と色彩の基本的な要素に焦点を当て、視覚的調和を追求したものである。しかし、デ・スタイルのこれら限定された表現に新たな要素である「曲線」を加えることによって、どのような効果、あるいはデメリットが生じるのかを考察してみた。造形分野において、曲線は「柔らかな流れる印象」を画面や形態に与えるために用いることがある。デ・スタイルの本質はその極めて幾何学的な厳密さにあるが、曲線を導入することによって、この厳密さが緩和される可能性も考えられる。この場合、曲線がもたらす視覚効果について十分に考察してから扱うことが重要なポイントと考えられる。

第一に考えられるのは、曲線の導入によって表現される要素の柔軟性が増すことであろう。直線

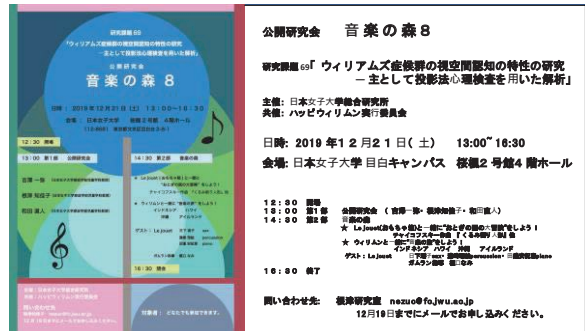


図14 音楽の森8のチラシとデジタル広告（2019）



図15 音楽の森9のチラシ（2021）



図16 音楽の森10のチラシ（2022）

は厳密であり決定的であるが、曲線はより自然な流れを持ち、視覚的な動きを生み出すことができる。つまり、造形作品全体により動的な印象を与えることが可能になるということである。例えば、曲線を加えることで、作品がスタティックな印象から、よりダイナミックな印象へと変化するのである。

第二の視覚効果としては、曲線は視覚的な興味を引き付ける効果を生み出す要素と考えられる。デ・スタイルの作品は、その単純さと幾何学的な正確さによって注目を集めているが、曲線の導入



図17 ベネズエラ国旗



図18 音楽の森16のチラシ (2024)

によって視覚的なアクセントが加わり、作品全体がより興味深いものになると考えられる。視覚的な対比やバランスが強調されることで、その作品へ観る者を引き込む造形的能力が増すことも予想できる。

しかし一方で、曲線をデ・スタイルの作品に導入することは、注意深く行わなくてはならない。デ・スタイルの造形運動の本質は、その厳密な幾何学的構造にあるため、曲線を過度に使用してしまうことで、作品の特徴が失われる恐れもあることを忘れてはならない。曲線を用いる場合、それらを慎重に配置して、デ・スタイルの原則と調和するようなデザインにすることが求められるのである。

図14ならびに図18は、デ・スタイルの水平・垂直ラインに曲線を加え、作品に新たな視覚的なダイナミズムをもたらす可能性を見出したチラシデザインである。さらに曲線を使用したことで柔軟性と興味深さをもたらし、作品全体を豊かな視覚体験に昇華させることを目的としている。ただし、このアプローチは慎重に検討を重ねて行っており、デ・スタイルの本質を損なうことがないように、新たな視覚的可能性を追求したものとなっている。

図18のデザインに関しては、ベネズエラの関係者をゲストとしてお迎えしたので、ベネズエラの国旗（図17）を意識したチラシデザインを制作した。ベネズエラの国旗は、国の歴史と文化を表現した鮮やかな色彩と象徴的なデザインで構成されている。国旗のデザインは3つの横縞と星によってできており、それぞれに深い意味が込められている。ベネズエラの国旗の色と星は、国の自然、歴史、そして国民の精神を視覚的に表現したものである。「黄」は国の豊かな資源を表し、「青」は自由への渴望、そして「赤」は独立のために流された血を象徴している。8つの星は国の団結と歴史的な州の重要性を示している。この国旗デザインは、単なる国のシンボルとしてだけでなく、ベネズエラの過去、現在、未来を映し出す鏡ともいえよう。これらの国の歴史と文化を表現した国旗デザインの各要素を盛り込みながら「純粋な構造における意識」による画面構成を主体として、8つの星の並びが作り出した曲線を加えて、黄・青・赤・白・黒を用いたダイナミックな印象を与

える動的で躍動感のあるチラシデザインを制作した。

参考文献

- ・ アンジェロ・デ・フィオレ／ジアンニ・ロッパ／ガスパレ・デ・フィオレ／マリナ・ロッピアーニ／ルイサ・マテルザニーニ／サビネ・バリチ著（石原宏・池上公平訳）『THE GREAT PAINTINGS 絵画の発見15 カンディンスキー／モンドリアン』（学習研究社、1993年）
- ・ ダニエーレ・パローニ著（石上申八郎訳）『現代の家具シリーズ〈3〉 リートフェルトの家具』（A.D.A.EDITA Tokyo、1979年）
- ・ 吉澤一弥・根津知佳子・和田直人「ウィリアムズ症候群の視空間認知特性の研究～主として投影法心理検査を用いた解析～」『日本女子大学総合研究所紀要』第23号、2020年11月、143-168頁

図版引用文献

- ・ ハンス・ヤンセン／五十嵐利治著『モンドリアン展』 展覧会カタログ（東京新聞、1998年）
- ・ Susanne Deicher: *PIET MONDRIAN 1872-1944 Structures in Space* (Benedikt Taschen, 1995)

Ⅲ ウィリアムズ症候群のきょうだいについての一考察： インタビュー調査から

安藤 朗子

1-1. はじめに

筆者らは、障害児・者のきょうだい研究と支援の動向を概観し、きょうだいは、障害児・者から肯定的及び否定的の両側面の影響を受けており、きょうだい自身が支援の必要な存在であること、障害児・者からの影響には、障害種別や家族関係等のさまざまな要因が関連しているため、個別性に応じた支援が必要であることを指摘した。また、現在行われているきょうだい支援は、同じ立場のきょうだいが交流する場における心理社会的な支援が主であるが、専門家からの教育的な支援や、きょうだいの発達段階に応じた支援、家族の関係性を視座においた支援も必要であり重要であることを示した。そして、今後のウィリアムズ症候群（以下、ウィリアムズと表記する）のきょうだい研究と支援の方向性として、①障害種による特徴、②きょうだいの発達段階における問題とその対応、③家族の関係性、④きょうだいとの協働、の4つの視点を提案した（安藤ら、2022）¹⁾。

以上を踏まえ、ウィリアムズのきょうだい3名にインタビュー調査を行ったため、以下に報告をする。

1-2. 研究目的

ウィリアムズの発症頻度は低く、社会において障害特性の認識は広まっていない。その障害特性は、他の障害と同様に、個性が高いものである。さらにウィリアムズの認知・行動学的側面の特徴は、一般的な発達指数や知能指数だけではわかり得ない非常に特異的なものといわれ、理解の難しさがある。

したがって、今回の研究目的は、きょうだいがウィリアムズの特性をどのように認識しているのか、また、過去から現在までのきょうだい関係や家族関係を踏まえ、今後の家族やきょうだい支援のあり方を検討することを目的とした。

2-1. 研究方法

研究対象者：協力者として同意の得られた次の3名である。

A：弟（20代）、B：弟（10代）、C：妹（10代）

調査日時：2023年8月6日（A：約60分、B：約60分、C：約30分）

調査方法：ウィリアムズの音楽キャンプ中に、筆者が対象者と1対1での半構造化面接を行った。

面接記録は、本人の了承を得て、筆記及びICレコーダーを用いて録音を行った。

調査内容：インタビュー内容は、（1）ウィリアムズの障害特性について、（2）幼少期から現在に至るきょうだい関係、（3）家族関係や他のウィリアムズのきょうだいとの関係、（4）今後の音楽キャンプに対する希望や意見、の4点である。

分析方法：インタビュー回答をテキスト化し、対象者への共通質問項目について、コーディングやカテゴリー分類等による質的帰納的分析を行った。

2-2. 倫理的配慮

日本女子大学における人を対象とした実験研究に関する倫理審査委員会において承認を得た(539号)。インタビュー開始前には、参加は自由意思によるものであり、中断・停止をすることができること、中断・停止により不利益を被ることは一切ないことを説明し、インフォームド・コンセントを実施し、対象者及び未成年者の保護者から同意書にサインを得て実施した。

なお、事例の記述においては、個人が特定されないような配慮を心がけて記述した。また、本文中で、対象者 A、B、C のウィリアムズのきょうだいについては、同胞と記載した。

3. 結果及び考察

3-1. ウィリアムズの特性についての認識

(1) どのように特性を知ったのか

親からウィリアムズの特性についての説明を受けた経験があった者は、1名だけであった。ただし、その内容については、ほとんど記憶に残っていなかった。また、別の1名は、一度自分で調べたことがあり、心臓が弱く、音に敏感であることを知ったと語っている。

インターネットで様々な情報が容易に入手できる今日であるが、自分の同胞の障害名は知っていても、その障害を詳しく知ろうと親に聞いたり、調べようとしたりする経験が予想外に少なかった。今回のインタビューでは、なぜ親に質問したり自分で調べたりしようとしなかったのかを尋ねることができなかったため、理由は不明であるが、以下のことが考えられた。

対象者全員が同胞よりも年下のきょうだいであり、その内の2名は、同胞と年齢が離れているため、本人たちが物心ついた時には、親と同胞の生活がある程度落ち着いていたり、同胞の特性で困ったり悩んだりする機会があまりなかった可能性が考えられた。

同胞と年齢の近い1名は、同胞と同じ学年のスポーツクラブの先輩から同胞の弟としてよく面倒をみてもらった経験があるなど、周囲の人たちとの良好な人間関係に恵まれていたこと、同胞とは別の中学に通ったこと、スポーツクラブなど自分自身が楽しんだり熱中したりする場所があったことなどの状況から同胞の障害をあまり意識する機会がなかったのではないかと推察された。

しかし、インタビューの中で、全員が同胞の長所や得意なことを本人たちなりに捉えており、同胞の短所や苦手な面についても生活を通して的確に把握していることがわかった。

(2) きょうだいが認識しているウィリアムズの特性

A、B、Cより語られた【長所や得意なこと】をまとめると次の通りであった。

感覚的に鋭く、誰かが機嫌悪いなどをすぐに察するところ、ホワンとしてピュアな心をもっていること。場の雰囲気に合わせて場を盛り上げることができる、対人的な距離の取り方が上手である、生活が規則正しい、自分よりも母親に忠実であること。優しいところ、集中力があること、であった。

それぞれの表現は異なるものの、周囲の人へ配慮ができる、人への優しさをもっているところが、3人に共通しているところであると考えられる。また、この特徴は、加藤(2013)²⁾が指摘している、同じウィリアムズのなかでも表現型は多様であるが過剰なまでの心配や不安がある、過剰なまでに社交的であり(特に大人に対して)相手の表情を読み取ることに長けている、ということに類似するものと捉えられる。

なお、Bは中学生の頃、自閉スペクトラム症の特徴をもつ友だちと出会うことで、同胞を含む音

楽キャンプに集うウィリアムズ全員が人と上手に距離の取ることができることに気づき、「全員すごい」という言葉で表現しているように、Bにとって衝撃的な気づきであったことが明らかになった。

一方、【短所や苦手なこと】については、初めてのものを説明されたときに理解が難しいこと、漢字があまり読めないこと、新しい場所に行く道順などを覚えること難しいことなどがあげられた。

初めてのことや場所を理解することが難しいということについては、覚えるまでに何度も繰り返し教えることが必要であるが、一旦覚えるとその後は自分ひとりでまじめに取り組めることを共通して語っている。新しいことを始める場合には丁寧に時間をかけて何度も援助をすることが必要であり、また重要であることをきょうだいは認識していることがわかった。

以上のように、きょうだいが認識している特性は、同胞との生活の中で、自分自身が同胞と関わることで、あるいは親と同胞とのやりとりを通して感じたり、気づいたりしてきたもので、きょうだいだからこそ把握できているものと考えられる。

3-2. きょうだい関係・家族関係・他の音楽キャンプ参加きょうだいとの関係

(1) きょうだい関係

きょうだいが捉える同胞と自分の関係を要約すると次の通りであった。

Aは、同胞が障害をもっていることをあまり考えてこなかったと語る一方、同胞の存在は、障害者が自分の家族にいないれば考えなかったことを考えるようにさせてくれて、人生に豊かさを与えてくれているということを語った。

Bは、親は子どもを世話するばかりでなく、子どもから世話をされることもあるように、同胞との関係も同様で上下の関係などではなく、家族はみんな「一緒」である。同胞と自分は、現在でも手をつなぐなどのスキンシップも多く、同胞は自分のことをかわいい弟だと思っているのではないかと語った。

Cは、怒ったり、喧嘩もするが、困っていたら助けてくれる優しい存在である。同胞は、自分のことを喧嘩のときは生意気なやつと思っているが、一緒にいるときは、なんかいいもんだなって思っていると思うと語った。

このように、回答は3人3様であったが、それぞれの語りについてさらに質問する時間がなかったため、語りの背景にある思いや考えを掘り下げて推察することはできない。しかし、語りの内容、語り方からは、同胞に感謝し、お互いに支え合う関係でもあり、良好なきょうだい関係であることが推察された。

Cebulaら(2019)³⁾の研究において、ウィリアムズとそのきょうだいにおける温かい関係性とウィリアムズの向社会的行動に正の相関が認められ、このような関係性は、ウィリアムズの子ども全体に典型的なものである可能性が高いことが指摘されている。

音楽キャンプに参加しているウィリアムズたちは、人と会話ができ、お互いを思いやる声かけもよく聞かれ、協力し合って活動を行うことができる人たちである。このような特性は、きょうだたちとの良い関係性の形成にも大きく関係していると考察される。

同胞が苦手なことに対しては、自分が助けなければといった気負いや助けてあげているといった感覚はもたず、普段の生活の中で自分ができる援助をできる範囲で自然に行っている様子が3人に共通してうかがわれたことが印象的であった。すなわち、援助者・被援助者といった固定した上下

の関係性ではなく、きょうだい間でお互い助け合うのが当たり前であるといった水平の関係性が存在することが特徴的である。

(2) 家族関係

A は、自分の家族の特徴として、一人ひとりが自由であると語った。自分を含め家族みんなが同胞のためにキャンプに参加するというふりをして、実は自分たちが楽しいから来っていると捉えている。

また、親が自分と同胞を違う中学校に入れたことについて、同胞にとっても自分にとってもその方がよいと考えてのことだったと肯定的に受け止めていることがわかった。そしてまた、A が小さい頃、母親が同胞を病院や療育の場などに通わせるときに、自分を連れて行っても自分は見ていだけで、いつも同胞が主役になっていたことを母親は気にしていたようだが、その分自分も習い事をさせてもらったりしたことで良い経験をすることができたと捉えている。そのような体験を通して母親が自分のことも気にかけてくれたことを感じ、感謝している様子がうかがわれた。

B は、キャンプに継続して通い続けている家族は、教育の方向性が同じであると捉えている。それは、ダメなものはダメと教え、しかしチャレンジの要素を残して、その中で自分のやれることを見つけるという方向性である。そのような方向性の中で同胞はちゃんと自分のやれることを見つけっていると語っていた。

C は、家族が大声で笑い合える関係であることを語ってくれた。

以上の通り、3 人ともネガティブな発言はみられず、ポジティブな関係を語っており、良好な家族関係であることがうかがわれた。

(3) 他の音楽キャンプ参加きょうだいとの関係

A、B、C の発言には、年齢による違いと思われる相違がみられた。

同じ音楽キャンプに参加している他のきょうだいについて、A は、ウィリアムズのきょうだいという同じ境遇はあまり意識していないこと、自分の同胞のことを話したりすることはないが、お互い心を開いて付き合っていると語ってくれた。

B は、「友だち」と言いながらも、同年の友だちと比べると言葉遣いなどに少し気を遣っているようであった。

C は、親に言わないことも他のきょうだいメンバーに話すことがあるということであった。

相談する内容などは不明であるが、年下のメンバーにとっては、音楽キャンプが年上のメンバーに相談する場にもなっていることがわかった。

3-3. 音楽キャンプへの思い：これまでと今後について

最も長く参加している A からは、みんながやりたいことをやりながらもお互いのことを思い合って演奏すること、音楽キャンプで大切にされていることが自分が大事にしていることと同じであることなどから今後も参加し続けたいし、今後もみんなも楽しく続けていってほしいという思いが語られた。また、音楽キャンプでは、きょうだいたちのグループに名前を付けて活動を行っていることに言及し、それは嬉しいことと受け止めていることがわかった。

B は、小学生時代に初めて参加したときに、自分よりも年上の人ばかりだったが、みんなが元気で楽しかったことが印象に残っていること、このキャンプでは、親同士の交流があるので親がいた

方がおもしろいと感じていると語った。自分は、キャンプが続く間は参加し続けると語っていた。一方、キャンプは今後も続いてほしいが、ウィリアムズの年齢が上がっていくため、現在の仲間ですべてまで継続できるのかを心配していた。

Cは、今後も参加することを楽しみにしていること、今回のキャンプのバーベキューでメンバー間の仲が深まったので、今後も皆で何かをやるよという意見を出してくれた。

以上のことから、音楽キャンプは、ウィリアムズのためではなく、家族みんながそれぞれの楽しみを感じ、主体的に参加している場であることがわかった。

音楽キャンプの今後については、きょうだいとしてどのような参加をしたいかなどの具体的な提案はなかったが、全員がこれまでのキャンプの継続を強く望んでいることがわかった。ただし、Bは、今後皆の年齢が上がっていくと現在の形で継続することができるとかという心配を抱いており、全員が集まれるのが難しくなれば一旦終了し、新たなウィリアムズのメンバーを迎えてこれまでと同様やり方でキャンプを継続する案を出してくれた。

4. 結論

本研究の対象のきょうだいは、ウィリアムズの特徴を、親から聞いたり自分で調べるという方法ではなく、生活の中で自分自身が同胞と実際に関わったり、親と同胞の関わりを通して把握していることがわかった。きょうだいが把握している同胞の特徴は、まさに一緒に生活しているきょうだいだからこそ把握できている特性であると考えられた。

また、先行研究においては、きょうだいは障害児・者から肯定的及び否定的の両側面の影響を受けていることが指摘されているが、本研究の対象者3人からは否定的側面についての語りがまったく聞かれなかった。

きょうだいたちは共通して、同胞に感謝し、お互いに支え合う関係でもあり、良好なきょうだい関係であることが推察された。また、家族の関係も良好であることがうかがえた。

同胞の苦手なことに対しては、自分が助けなければといった気負いや助けてあげているといったような感覚はもたず、自分ができる援助をできる範囲で自然に行っている様子が特徴的であった。このように同胞と良好な関係性を築いていることの背景には、ウィリアムズたちが周囲の人に配慮し、優しいこと、良好なコミュニケーション力をもっていることなどが関連しているのではないかと考察された。

また、長い間家族と共に音楽キャンプに参加し続けていること自体が、良好なきょうだい関係や家族関係の形成や維持に大きな意味をもっていると考えられた。

今回のインタビューを通して、音楽キャンプは、ウィリアムズのためだけではなく、きょうだい、家族のみんながそれぞれの楽しみを感じ、主体的に参加している場であることが明らかにされた。そして、きょうだいたちは、今後も継続して参加したいという強い希望をもっており、継続した支援の必要性が示唆された。

5. 今後の課題

ウィリアムズの特徴や、きょうだいや家族との関係、音楽キャンプへの思いについてきょうだいたちが実際に語ってくれたことから多くのことが示唆されたが、対象者は3人であり、ウィリアムズのきょうだいの特徴として一般化することはできない。また、年齢もさまざまであったため、きょうだいの発達段階における問題等についての検討はできなかった。今後、事例を増やして検討

をすることが課題といえる。

謝辞

音楽キャンプの活動の時間を割いてインタビューに応じてくれた3人のきょうだいの方々に心から感謝いたします。

参考文献

- 1) 安藤朗子、吉澤一弥、和田直人、甲斐聖子、根津知佳子「ウィリアムズ症候群のきょうだいに関する研究—障害児・者のきょうだい研究の概観と本研究の方向性の検討—」『日本女子大学大学院紀要』第29号、2022年3月、235-243頁。
- 2) 加藤竹雄「ウィリアムズ症候群の子どもたちの特性：神経心理評価について」『CREST 発達障害のエピゲノム解析 Williams 症候群サブグループ』エルフィン関西勉強会、2013年 <https://sites.google.com/site/elfinkansai/home/yi-litsu-qing-baopeji> (2022.6.3閲覧)。
- 3) Karie Cebula, Amanda Gillooly, Laura K. Coulthard, Debarah M. Riby, Richard P. Hastings, “Siblings of children with Williams syndrome: Correlates of psychosocial adjustment and sibling relationship quality.” *Research in Developmental Disabilities*, Vol.94, 2019.11, Article103496.

Ⅳ 絵本『なみ』を「成長」をキーワードに読み解く試み

甲斐 聖子

はじめに

筆者は、総合研究所研究課題80（2022年度～2023年度）よりウィリアムズを対象とした“支援プログラム”の開発に、児童文化領域からの視点を持ち参加している。本稿では、主に2023年度の音楽キャンプのプログラムのひとつとして、根津が考案した絵本『なみ』（スージー・リー作 講談社、2009年）を用いた活動「世界でひとつだけの音絵本づくり」について考察を行う。手順としては、まず絵本『なみ』の物質的な構造上の特徴、お話しのプロットを整理し、作者スージー・リー（Suzy Lee／이수지）の略歴や作家としての位置づけ、人となりを示した上で、「成長」をテーマに絵本論を展開し、その後ウィリアムズが行ったプログラムについて言及したい。尚、筆者はファシリテーターとして現地でプログラムの進行をしたわけではないため、本稿においては、各グループが完成させた成果物からの考察となることをはじめに伝えておきたい。

1-1. 素材としての絵本『なみ』に見られる「成長」

絵本『なみ』は、縦185mm × 横310mm と横長の判型の本である。絵本を開くと縦はそのままに、横幅が2倍の620mm となるため、一般的な絵本の判型と比べても画角がパノラマとして捉えられ、画面が横に広い印象を持つ。また、文字情報としての「ことば」が本文部（ほんもんぶ）に一切ないため文字なし絵本と呼ばれるジャンルに位置する。左開きにページをめくことで、右方向に時間軸（物語）が進行していく。地には紙の白い余白を有効に使い、図として少女、5羽のカモメ、波、母と物語を構成する人やモノはいたってシンプルである。表カバー（表紙は別のデザイン）には、波打ち際に立つ少女の後ろ姿、中央の「なみ」の題字を挟むように、左側には海に飛び行く4羽のカモメの後ろ姿が、左には浜へと戻る4羽のカモメが描かれている。少女は、目前に広がる海のスケールに圧倒され、後ろ重心に立つように見え、左右に分かれて描かれたカモメが海に向かい浜へと戻ってくる様から、この絵本が児童文学作家・翻訳家の瀬田貞二のいう「行きて返し物語」¹⁾を暗示させるデザインであることをまずは指摘しておきたい。表見返しには、水分を多く含んだ砂浜が描かれ、扉（内側のタイトルページの意味）には絵本の綴じ部である中心部「のど」を境にして、左側に砂浜を勢いよくかける少女、すぐ後ろには日傘を差しふたり分の靴を手に微笑む女性が描かれる。その温かみのある表情や親密さから少女の母であることが推察できる。頭上には五羽のカモメ、そして遠くには山並みが見える。右下には彼女の第2子である「Sahn」（山の意味）に贈ると書かれている。画面中央部に空と陸地の間に地平線を表す一本の線が引かれ、右ページの端まで続く。「のど」の右側にはどこまでも続く砂浜をバックに水色で「なみ」の題字、上にスージー・リーの名前、下には出版社である講談社の文字がある。その先、本文部は白地の背景に、空、陸を隔てる一本の地平線が中心よりもやや上部に描かれている。本文部からの構成については、以下表に示す。

上記に記した絵本の構成物のリストであるが、本表では第11場までは左ページ、右ページを別の画面として扱い、第12場からは見開きで1画面として表記した。これは第11場までと、第12場からでは、物語世界がガラリと変化するためである。

表1 絵本『なみ』の構成

場面	左ページ	右ページ
第1場	波の様子を見る少女、その後ろに5羽のカモメ、遠くに山並み	返す波
第2場	寄せ波に目線を送りながらも波から逃げる少女、足早に逃げるカモメ、遠くに山並み	「のど」の際まで寄せる波
第3場	両手をあげて威嚇のポーズを取る少女、2羽のカモメも翼を広げ少女に続き同調。遠くに山並み	返す波
第4場	波が「のど」より先（左ページ）に来ないことをしゃがんで不思議そうに見つめる少女。様子を見る5羽のカモメ。遠くに山並み。	勢いよく「のど」にぶつかるように寄せる波、しぶきをあげる。
第5場	「のど」の先（右ページ）に左手を伸ばす少女、その頭上に見切れるように飛び立つ5羽のカモメ。遠くに山並み。	返す波、カモメの半身
第6場	一番後ろに続く1羽のカモメ、遠くに山並み	少女の体が「のど」を境に見切れて描かれる。4羽のカモメ、寄せる波
第7場	遠くに山並み	波と戯れる少女、5羽のカモメ カモメの羽がわずかに水色に色づく
第8場	薄れゆく遠くの山並み	ページいっぱい勢いよく波と戯れる少女、5羽のカモメ
第9場	霞む遠くの山並み	少女の背丈より高い大波、固まる少女、驚く5羽のカモメ
第10場	先だって逃げる5羽のカモメ、消えた山並み	複数で寄せる高い大波、慌てて逃げる少女
第11場	ページの先へと逃げるカモメ、中央にあっかんべーをする少女	見切れるほどの柱上の大波
第12場	「のど」を中心に画面いっぱいに描かれる水しぶき	
第13場	画面のやや左側で波に打たれ、ほうぜんと尻もちをつく少女。1羽のカモメがその様子を覗いている。空に海と同じ水色が広がり遠くに山並みが復活する。 砂浜にしぶきと共に目をこらすとたくさんの貝殻が描かれる。 少女の衣服も波と同様の水色に染まっている。	
第14場	返す波の傍で砂浜にたくさんの貝殻を見つけた少女、カモメがその周りを囲っている。水色の空と遠くに山並み。	
第15場	見切れて描かれる日傘の母（姿は描かれていない）に両手に貝殻をもち見せる少女、見てみるとばかりに5羽のカモメも少女に同調する	
第16場	波に両掌をひたし、感謝や別れを惜しむかのように目をつむる少女、波に写る少女の姿。海の方へ帰るカモメ。穏やかな波。少女を背後から見つめる母	
第17場	砂浜を後にする親子、海へと手を振る少女、日傘を差し少女の肩に手を添える母、水色に色づいたふたりの靴、遠くに5羽のカモメと山並み	
奥付	穏やかな波うち際を上から見た様子	
裏見返し	砂浜にたくさんの貝殻	
裏カバー	スカートを袋かわりにいっぱいの貝殻を持ち微笑む少女、頭にはカモメが一羽、水色のしぶき	

絵本の見開きを1画面ととらえずに、時間的な経過を1画面上に配置することで左右のページを異なる画面として扱うことや、枠などを用いて画面を更に細かくコマ割りにして分割することは絵本の構造上の表現として珍しいことではない。しかし、この絵本の場合は絵本の綴じ部である「のど」を画面の中心に置き、パノラマの1枚絵として海辺での少女の様子が全場面でほとんど定点的に同じ画角で描かれている。ここで、少女のいる1枚の風景を半分に分断し、別々の画面として扱う理由は、「のど」を隔てた左側と右側が、別の物語世界を描いている為である。第11場までは、左側は少女が住む世界、右側は波うち際が示す自然界が描かれている。第12場までは、ふたつの世界は寄せては返す波のように交錯しながら、時間の経過と共に少女の心が緩やかに解放されていく過程が描かれる。そして波の度重なる挑発（自然への誘い）の後、頭から大波を浴びるという衝撃的な体験が装置となって、完全にひとつになるのが第12場である。ここでは第12場以降ふたつの世界がひとつの世界となったことを視覚的に表している色に着目したい。それまでモノクロームで木炭の線のみで描かれていた少女の洋服、空、カモメ、母の靴や傘などが、第12場からは、なみ（うみ）と同じ水色に鮮やかに彩色されている。このことはふたつの意味を持っている。ひとつは、全編を通して波打ち際にいる少女を読者が俯瞰してみているようなパノラマ構図をもつこの絵本が、第三者側（読者）の目線ではなく、少女自身の目線に広がる景色が描かれているということである。言い換えると、我々読者は少女と波の遊びを第三者の立場で見守っているわけではなく、少女の目を通して自然を見ていることになる。

もうひとつは、モノクロームから彩色の過程が少女の成長を表していることである。ある夏の一日、少女が海で体験した出来事は、成長と言っても身体的な泳ぎの獲得といった量的な水平的成長ではない。この場合には、荘厳な海（自然）への畏怖や我々人間が自然と共にあるということ、海からの贈り物である貝殻を見つけ感謝する様など少女の自然観がアップデートされるという、質的な垂直的成長が描かれている。発達において、人間は生涯を通じて成長をし続けるというのが、我々も日々の暮らしのなかで意識すらしないような小さな成長を重ねている。この絵本は、華やかな展開はないがこの無意識下に近い少女の成長の様をすくいあげるように描いており、我々読者はこの絵本を通してその成長の過程を追体験しているのである。

1-2. 作者スージー・リーについて

次に『なみ』の作者であるスージー・リー（Suzy Lee / 이수지）について簡単に紹介する。1974年に韓国ソウルで生まれ、自らの職業を picture + book Artist（絵+本 作家）と表す。その理由として、ソウル大学美術学科で絵画を学んだのち、イギリスのロンドン芸術大学キャンバーウェル・カレッジでブックデザインを専攻したことで、本という「もの」の構造上の形を意識した作品作りに目覚めたからだろう。在学中にボローニャ児童書フェアに持ち込んだ『Alice in Wonderland』がイタリアのエディツィオーニ・コッライニ社（Corraini Edizioni）の編集者の目にとまり、2002年に同作でデビューする。その後、彼女の代表的な作品群である境界線3部作と呼ばれる文字なし絵本『Mirror』（2003年未邦訳）『なみ』（2009年、講談社 原著の出版年は2008年）『かげ』（2010年、講談社）のほか現在に至るまで多数の出版がある。

境界線3部作は、本の物理的な中心である『のど』をファンタジーと現実の境界として使用している。ページの片側には、鏡の前、海辺、物置の中にいる少女が描かれ、ページのもう片側には彼女の空想による創造的な世界が描かれる。『なみ』の原書『Wave』は、2008年のニューヨークタイムズ紙の最優秀児童図書賞ほか、アメリカで数々の賞を受賞し、2013年にはIBBY Silent Books

Honor List に選出されている。他の作品で2021年と2022年に連続でボローニャ ラガッツィ賞（フィクション部門特別賞）を受賞し、2022年にはこれまでの作家活動が評価され、絵本界のノーベル賞と呼ばれ権威ある国際アンデルセン賞（画家賞）を受賞した実力を持つ。

世界各国で開催されるブックフェアへの招聘も多く、世界中で講演やワークショップを行うが、同時に2人のこどもを持つ母でもある。日本女子大学の特別重点化資金による招聘活動で2011年と2019年に来日し、講演およびワークショップを開催するなど本学との縁も深い。ドシエ（国際アンデルセン賞推薦時の資料）で、絵本とは「最も真剣な物語を最も洗練された形で表した、楽しい遊びのかたち」、自身については「絵によって命を吹き込まれた物語をとおして、読者と一緒に遊ぶ人」だと述べている。これらからは、リーの作品に対するオープンマインドな姿勢がうかがえる。

特にリーの文字なし絵本では文字情報となることば（テキスト）を省き、描写自体も極力シンプルに徹することで、読者が自分の経験と少女の物語を往還できることや、それぞれが絵本との対話を通し自分の物語を紡ぐ余地を残している。3部作と言っても、『Mirror』と次作『なみ』は続けざまに発表されたわけではなく、6年の期間がある。2007年までの間に、『The Zoo』（2004年）ほか共作併せると4冊の絵本があり、2008年の1年間には『Wave』のほか共作併せて4冊の絵本を刊行している。また私生活では2児の母親になるという経験をしている。リーの作品には幼い少女が主人公の作品が多く、3部作もそうである。しかしながら『Mirror』と『Wave』『Shadow』の間には、少女の内面の描き方に大きな違いがある。それは女性として母親という新たな役割を持ったことで生まれた自身の成長の積み重ねによるものであろう。家族の形態が変わり、子どもと過ごす日常のなかで、子どもの想像力の豊かさや、日々の成長など驚きの連続を彼女の職業である絵本作家として、絵本という時間表現メディアに還元することで、同じ「のど」に着目した一連のシリーズであっても『Mirror』にはない、ささやかな子どもの成長とそれを見守る母の目が新たな要素として加わった。更には、境界線3部作の成り立ちや、自身の絵本表現に関する取り組みを書いた理論書の出版を行うなど、明確に自分の言葉を持つ理派の作家でもある。リーは近年、絵本を音楽と結びつけるような作品作りにも取り組んでいる²⁾。筆者は2011年に作家招聘の際の講演会において、音楽付きの『Mirror』『なみ』を視聴した経験があるが、2021年にBIR社から出版された絵本『여름 협주곡 Summer Concerto』はヴィヴァルディのヴァイオリン協奏曲集『和声と相違の試み』作品8の「四季」のうち第2曲「夏」をテーマに掲げた作品だ。これは、絵本の中に動きや音楽を取り入れるために、QRコードを絵本の中に印刷し、読者が音楽を聴きながら絵本を読むことを想定した絵本である。常に新しい可能性を絵本に見出し、様々に模索する中で生まれたのが、本プログラムで採用された絵本『なみ』である。

2-1. 「世界でひとつだけの音絵本づくり」ワークショップの成果物から

2023年度で第22回を迎えたキャンプ「ハッピーウィリムン」の参加者の多くは、子どものころから参加し、今では成人となって仕事を持ち中には親元を離れ、ひとりで生活する者もいる。一年に一度のキャンプは、彼らにとって非日常的なイベントであり、キャンパーとしても楽しい再会の時、交流の場であり成長の機会でもある。海辺が近く潮のにおいに囲まれた施設で行われるキャンプでは、数日間を仲間や家族、スタッフと共に生活し、バーベキューなど食の機会を交えた楽しみもある。プログラムのひとつである「世界にひとつだけの音絵本づくり」は、文字なし絵本『なみ』のカバー表、表見返し、扉、本文部第17場、裏見返し、カバー裏と、全22画面をパワーポイントに貼り付け、各画面に音を付けて立体化させる試みである。（詳細な活動記録は「創造的音楽活動に内

在する対話の多層性」日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科第30号 pp127-137に記載) キャンパーたちは、全5グループに分かれて活動し、それぞれが絵本や仲間との対話を通じて、絵本をデジタル化した作品を完成させた。

キャンパーたちが作った作品は、「効果音」「ナレーション」「セリフ」「背景音」と様々な種類の音がみられた。これは、映像メディアにおける音の構成要素をほとんど網羅している。以下図参照。

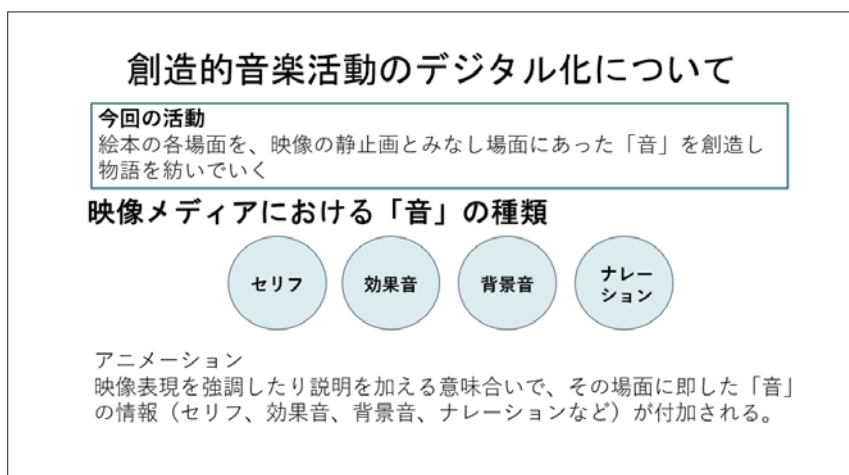


図1 映像メディアにおける「音」の種類

キャンパーたちの作品からは、環境や体験を有効に活用し、音作りを行っていることが分かり、そのなかにはオリジナルのオノマトベ（擬音語・擬態語）や効果音が創造されていることが分かった。

2-2. それぞれの『なみ』

次に出来上がった成果物（作品）から、具体的に絵本のどのようなところに着目しているのかを考察したい。

A グループ

全体の音の構成要素としては、セリフ、効果音、背景音があった。特徴としては、本文部の前と後の余韻が他のグループよりも長く取られていることがある。また、5羽のカモメたちが、少女を見守る守護的な役割を持っているところも興味深い。カモメは「にゃーお にゃーお」とオリジナルのオノマトベを使って鳴き声が表現されている場面と、「いけんじゃねえ?」「やめとけて」「ほおら言わんこっちゃない」など、波に興味津々の少女に助言をしたり、諭したりするようなセリフが語られる場面がある。

B グループ

全体の音の構成要素としては、セリフ、効果音、背景音、タイトルコールがあった。このグループの特徴としては、まずタイトルである「なみ」を読み上げてから始まり、終わりには「おーしまい」と物語の終わりを知らせる言葉かけが採用されていた。セリフが他のグループと比べると整理

されており、シンプルさが際立つ構成である。セリフがない場面では、採集した効果音や背景音の波やしぶきの音、砂地を歩く足跡、風の音が際立ち、言葉の余白場面（セリフないところ）では、描かれた少女の様子に意識が向かうため、物語を静かに味わう余白が生まれている。カモメの鳴き声を表すオリジナルのオノマトペは「フン フン フン」であった。

C グループ

全体の音の構成要素としては、セリフ、効果音、ナレーション、背景音である。このグループの特徴は、最後に総括として「鳥と少女と波の鬼ごっこは夏の宝石箱でした」というナレーションが入ることである。第9場から10場にかけて、波がかえす様子を、「ずわー ずわー」というオリジナルのオノマトペで表現しているところや、第13場で、少女が大波を頭から被るところでは、同キャンプで作成した組子風鈴の音色を流すことで、場面が大きく変わったことを示すことに成功している。その後、少女が砂の中にたくさんの貝殻を見つける場面でも同オリジナルの楽器を使い、キラキラと美しいさまを表現している。最後のナレーションで語られる、「夏の宝石箱でした」には、貝殻が宝石のように美しい様子と、少女が波打ち際で体験した思い出が宝石のようであるという、ダブルミーニングが感じられ、視聴後の余韻が美しい作品に仕上がった。

D グループ

全体の音の構成要素としては、セリフ、効果音、ナレーション、背景音である。このグループの特徴としては、まず冒頭に「とある河芸での海岸でのこと」とアナウンスがあって始まることである。河芸とは、実際に彼らが滞在しているキャンプ地であり、この絵本と、自分たちのいる場所を明確に紐づけていることが分かる。波が「おいで」と少女を誘ったり、第9場で波と戯れるところでは「わーい」と少女と一緒に楽しく遊ぶ様子が伝わってくる。第16場で、母親が「帰ろう」と少女に帰宅を促すセリフがあるが、「やだ、帰りたくない」と少女が拒否するセリフが語られるのはこのグループのみである。

キャンパーたちにとっても、キャンプは1年で一度の特別な機会であり、冒頭のナレーションと相まって、キャンパーたちがキャンプの終わりを想像する寂しい気持ちや、少女の帰りたくない気持ちと同調しているように感じられた。第17場で、母親の「何していたの?」という問いに対して、少女が「貝殻拾ってたの」と答える場面があるのだが、その後裏カバー部分では、少女「ねえねえ いっぱいとれたよー」カモメ「たくさんとれましたー」というナレーションがついている。果たしてこれは誰に向けた言葉だったのか考えてみると、冒頭のナレーションに行きつく。この言葉は作品を共に観るキャンパーたちに向けられたものではないだろうか。本活動を通して絵本の中に没入し、少女と共に体験した一日の出来事を仲間のキャンパーに報告しているように感じられた。

E グループ

全体の音の構成要素としては、セリフ、効果音、ナレーション、背景音である。このグループの特徴としては、表カバーと裏カバー場面でのナレーションである。冒頭では、「無料魚とりインジャパーン」のナレーションのあと「波の音」を背景音に、「ジャパーン ジャパーン…」と続く。これには、トリプルミーニングが込められており、①「日本」②「波の音」③ウィリムンの保護者の愛称「〇〇ジャパン」である。特に③の愛称はキャンパーたちにとっても、親しみがあり発表するときに盛り上がることを予想している様子が発声の調子からも伝わって来る。グループで活動に取り組みながらも、完成させたのち、みなで共有することまでを見越して、作品の中に楽しみを仕掛けているのである。裏カバーでは、「無料魚とりインジャパーン」というナレーションが付くが、この絵本中には魚の姿はない。カバー裏で、貝殻をスカートに持つ少女の絵を魚とりと勘違いして

音作りの活動がスタートしたのだが、現実世界でも魚とりに行って収穫がないことなどはよくあることで、この勘違いもまた、オリジナルのプロットであり創造的と言える。最後、イエーイという歓声が入っており、作品完成の充実感と、共有する期待感の両方が感じられる。

2-3. 『なみ』のデジタル化から見えるキャンパーたちの「成長」

前項では、全5グループの作品を構成する音の要素と、それぞれの作品の特徴を示し、簡単に考察を行ってきたが、どのグループの作品も独創的かつ創造的であることが分かった。効果音や背景音一つとっても、バリエーションが豊かであり、楽器の使用や、音の採集、声や口笛など己の身体機能を活用した表現がよいのか、場面ごとに適切な音の選択がされていたように思う。海辺ならではの波の音の採集や、賑やかなカモメたちの声色も、実際のカモメの鳴き声を参考にオリジナルのオノマトペに工夫がみられた。

あえてセリフを省いて、効果音・背景音で情景を際立たせることや、セリフをいうタイミングや声色の調整なども、キャンパーたちが構成を話し合い出来上がったものである。

キャンパーたちが、家族やスタッフと共に絵本を鑑賞し、じっくり絵本に向き合う時間からは、他者がどのようにストーリーを解釈し、どんなことを感じるのか、また最終的にどんな作品に仕上がるのか一連の活動を同じ空間で共有することで、相互にたくさんの気づきをもたらすことが期待できる。目から入る情報からそれぞれが独自の物語を創造し、それを音にして、立体化していくそのプロセスもまた、絵本を味わう活動として創造的であるといえる。これは、絶対音感を持つと言われるウィリムンの身体的な優位性のひとつかもしれないと感じた。

本項の前半部で、筆者による『なみ』の絵本論について講じているが、ウィリムンたちの物語理解が非常に的確であることがプログラムの成果物である作品の考察から分かった。これは、キャンパーたちが、「絵本との対話」「自己との対話」「仲間との対話」を通じて、絵本に音を付けるという活動に伴い繰り返し反芻した成長の積み重ねの結果だといえよう。海辺のキャンプ地という環境設定と相成り、キャンプ全体を通しての経験や体験からそれぞれが独自の物語を創造し仲間と協同しそれを音にしてひとつの作品へと立体化しているが、成果物だけでなく作品ができるまでの道のりやキャンパーたちと共に完成した作品と一緒に視聴するすべての工程が絵本を味わう活動として創造的であるといえる。

注

- 1) 児童文学作家・翻訳家の瀬田貞二が、子どもが喜ぶお話しには構造上のパターンがあることを指摘し「行って帰る」という言葉で表しており、この語は名詞化されつつある。
- 2) Suzy Lee, Suzy Lee's Picture Books - The Border Trilogy (2011年、BIR)

V ウィリアムズの活動における概念形成のプロセス —胚細胞研究における予備的考察—

吉澤 一弥

1. はじめに

筆者は2023年11月25日の総合研究所の発表会で、ウィリアムズ症候群と家族の支援プロジェクトにおける「今後に生かす観点からの分析」として、活動理論のメタファーとしての胚細胞（germ cell）の概念に着目した考察を行った。これまでのプロジェクトで開発され活用されている支援モデルやツールに関して、見出した胚細胞とモデル化プロセスのアウトラインを示した。また直近の2023年8月の音楽キャンプ内で実施した安藤らによる3人のきょうだいを対象にしたインタビューの分析から、胚細胞候補となるいくつかのモチーフを提示した¹⁾。

本稿はそれを理論的な観点から深めることを目的とする。最初に活動理論における拡張的学習というカテゴリーを元に、概念形成とくに胚細胞の考え方を精査する。そして活動理論における代表的な胚細胞の例を紹介する。その上で、ウィリアムズの音楽キャンプを中心としたこれまでの活動における概念形成と胚細胞についての試論を述べたい。

以上の胚細胞研究は、筆者が活動に部分的にかかわって知り得た情報の範囲や限られた文献的な知識という制約があり、また洗練度が不十分であることは否めないが、多少なりともプロジェクトの今後のビジョン策定に生かせればと考える。

2. 理論について

2-1. 概念形成における胚細胞の位置づけ

フィンランドの文化・歴史的活動理論学（cultural-historical activity theory：以下、活動理論と表記）の第一人者である Yrjö Engeström は、活動理論を特徴づける概念カテゴリーとしての拡張的学習（expansive learning）の輪郭と機能を様々な表現を用いて定義している。その豊かな内容には、彼が哲学や心理学などにも造詣の深い教育学者であること、教育理論と発達理論の新しいパラダイムを拡張的に発展させたことが反映されている。

拡張的学習についての言明の中でも中核をなすのは、概念形成（concept formation）という創造的思考プロセスと胚細胞（germ cell）への着目であろう。「拡張的学習とは概念形成であり、そこで形成されるべき概念とは、いまだここにはないものである。それは文化的に新たな成果として生み出されなければならない。…胚細胞を特定しモデル化することである²⁾」と Engeström が述べているように、それ以外の性質から明確に区別される。概念形成ではない思考や活動は除外され、いまだここにはないものという点からは既存の知識の習得のような予定調和的な活動も該当しない。文化的財と関係しない非社会的な活動からも区別される。そして胚細胞を特定してモデル化する点が必須となる。「真の概念形成と概念的思考は、知覚的に具体的な現象から実質的な抽象化、精査しているシステムの発生的に原初の内的矛盾を表現する『胚細胞』へと、まずは上向して動いてゆく。その後、この発展の基礎からさまざまな特殊なものの発現を演繹することで、具体的な一般化へと進む。Georg W. F. Hegel と Karl Marx に従えば、この手順は、抽象から具体への上向と呼ばれる³⁾。」

つまり、胚細胞はこのように内的矛盾の関係性を含んだものである。そして、それを生み出す抽象化の段階とその後の具体化の段階は、「抽象から具体への上向（ascending from the abstract to the concrete）」という弁証法の論理による。

一部で解かりにくさが指摘されている「抽象から具体への上向」の捉え方や運用に関して、概念形成における前半部分である抽象化の段階（胚細胞を見出しモデル化する段階）と、後半部分の具体化の段階（そのモデルを実践の中で検証し応用しながら更新する段階）の2つのフェーズに分けて考えることを筆者は提案したい。

近年、「野生における概念形成（concept formation in the wild）」として洗練されている点にも注目したい⁴⁾。これは実験場面や教室などの制御された環境ではなく、現場実践の中で集団的に創造される文化的に新しい概念形成を指す。Engeström が最近接発達領域（zone of proximal development）を可視化するために使用している4象限モデルでは、右上の座標面に野生の概念形成の軸と性質が置かれている（図1）。これは次の5つの指導的アイデアから成る。①歴史的に進化する集団活動システム内でなされること（対象を把握する道具としての概念）、②質的に異なるタイプの概念（理論的概念と経験的概念の統合）、③抽象から具体への上向（胚細胞の構成と応用）、④本来的に多価値的、論争的、動的であること（緊張と矛盾を内包する、異なる視点間の葛藤の触媒性）、⑤二重刺激法による変革的エージェンシーの生成との融合（変化と未来志向）。野生における概念形成は、第4世代の活動理論における新たな胚細胞の集団的な創造の支援の文脈で活用される。

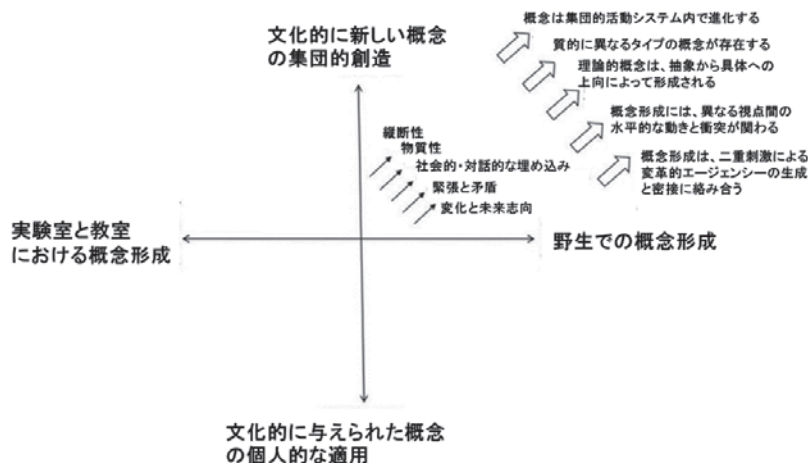


図1 野生での概念形成研究のための指導的なアイデア

(Y. Engeström (2020), “Concept formation in the wild: towards a research agenda”
から引用し翻訳した)

2-2. 胚細胞のメタファーについて

元々は遺伝学概念である胚細胞は、さまざまな分野で出発点を意味するメタファーとして用いられている。このあたりの事情を見てゆくことで、活動理論における胚細胞メタファーが意味するところを明確にしたい。

そもそも遺伝学における胚細胞とは、多細胞生物が個体として発達する最初の段階に存在する細胞群のことである。配偶子が受精することで接合子が形成され、胚発生のプロセスが開始される。卵割、胞胚、原腸、そして器官形成の段階を経て進行し、多細胞の胚が形成される。つまり胚細胞は、生物が誕生または孵化する前の初期段階を指し、生命の始まりと発達の基盤を示す。

メタファーとしての胚細胞は、生物学以外のさまざまな分野でライフサイクルにおける始まりや基礎を表現するために用いられている。例えば製品のライフサイクルでは、設計され、製造され、販売され、使用され、最終的に廃棄されるまでの一連の過程の出発点としての設計や開発段階を意味する。ビジネスのライフサイクルでは、ビジネスの成長と発展の過程の出発点となるビジネスアイデアが胚細胞である。人間の心理的発達のライフサイクル論においても、生涯を通じての成長と発達の過程の最初期段階を指し示す。一方で、活動理論における胚細胞メタファーには、活動システムの歴史的矛盾の関係性を内在するという厳密な定義が与えられている。

2-3. 拡張的学習の他の側面

概念形成と胚細胞の周辺およびそれ以外の拡張的学習の側面について、筆者が活動理論学会での交流や文献^{5) 6)}に触れる中で把握できた事柄を要約する。

①介入主義

Engeström の介入主義は、実践を通じて新しい理論を形成し、実践者のエージェンシーを高めることを目指す。彼は、予定調和的な従来の線形的介入とは異なり、未知の目標（いまだここにないもの）に向けて学習者との対話を重視する形成的介入（formative intervention）を提唱した。このアプローチでは、文脈に応じた新しい解決策を創出することが目的であり、変化を促進するための枠組みを構築する。彼は、このような動的な介入を通じて、実践の場を革新し、未来志向の改革を推進することを強調した。

形成的介入のアイデアは、Lev S. Vygotsky の待機実験（waiting experiment）における二重刺激法（double stimulation）に由来する。この実験では、被検者に対して指示なしに行動を決定する状況を与えることで、自発的な問題解決が生じる過程を観察する。被検者は取り残された部屋に留まる動機と立ち去る動機の間で引き裂かれた（第一の刺激）。しばらくして時計を使って部屋を出るタイミングを決めたように、彼は手近にある人工物（第二の刺激）を記号として利用し、意味を見出すことで課題を解決した。Vygotsky 学派では二重刺激法という呼び方以外にも、実験・発生的方法、道具主義的方法、歴史・発生的方法などと呼ぶことがあり、異なる名称のひとつひとつがこの原理の重要な側面を表現している。

Annalisa Sannino は、Vygotsky の待機実験を慎重に追試し、二重刺激法を変革的エージェンシー（transformative agency）を生み出す仕組みと捉えて図式化した（図2）。また、最新の介入研究から第二の刺激のリストを作成した。物質的な人工物として、時計、カレンダー、コーヒーカップ、指に巻かれた紐、メモ、そしてマッチなど、談話的な人工物として、特定のトピックの議論、一連の問いかけ、歌などを挙げた。彼女は、この仕組みについて、航海中の船舶がしけの海域から脱出を図るために前方へ投じるケッジアンカー（錨）のメタファーを用いて表現した。つまり第二の刺激が問題解決に意味を持ったことを、「ケッジアンカーが（海底に）ヒットする」と描写した。こうした流れは、最先端の第4世代の介入研究における対象（object）や分析単位（unit of analysis）の選択と構築、そして野生における概念形成の必要条件の構成に大きな影響を与えている。

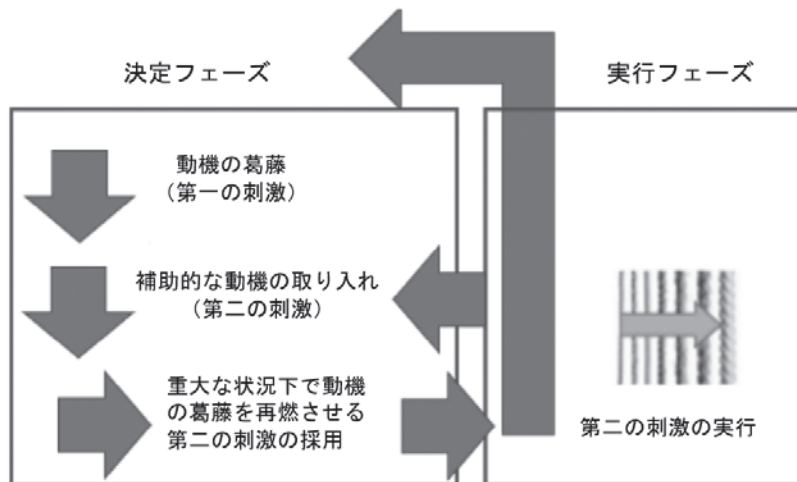


図2 二重刺激法による変革的エージェンシーの発現プロセス

(Y. Engeström, A. Sannino (2021), “From mediated actions to heterogenous coalitions: four generations of activity-theoretical studies of work and learning”から引用し翻訳した)

②集団主体

拡張的学習におけるもう一つの重要な視点は、「集団主体」への拡張である。活動理論の第1世代である Vygotsky は、文化的人工物（言葉などの記号）によって媒介される行為のアイデアを提唱したが、基本的には「個人主体」を分析単位とした。彼の弟子であり研究仲間である Wassily Leontief は、狩猟の例を用いて、分業とルールの発生による集団主体への拡張的移行を論じた。原始時代の狩猟では、一つのグループが獲物を追いつめ、別のグループが待ち伏せて獲物を仕留める。集団的活動は終点が定められず、表面上は同じ行為を繰り返しながら活動自体を再生産しているように見えるが、実は絶えず変化があり、ときには劇的で不連続な変化（新たな文脈の創造）が生じる点が拡張の所以である。

この行為から活動への拡張的移行を基に、「活動システムの一般モデル」として有名な三角形のモデル化が行われたと理解できる。これに伴って Engeström は、個人主体のアイデアである Vygotsky の最近接発達領域の定義を、集団主体の観点から「個人による現在の日常的諸行為と、そうした日常的諸行為の中に潜在的に埋め込まれているダブルバインドの解決として集団的に生み出される社会的活動の歴史的に新しい形態との間の距離」と再定義した。

③弁証法

弁証法には多様な解釈が存在するが、活動理論においては Evald V. Ilyenkov の見解が採用されている。彼は、Hegel と Marx の弁証法の理論を基礎とした。Hegel は、理性が直面する矛盾を肯定的に捉え、有限なものはその内的矛盾を通じて新たな段階へと進化すると考えた。これは、現実世界のあらゆる動きの根本原理とされる。一方で Marx は、Hegel の弁証法を資本主義の社会経済に適用し、唯物論的な視点で捉え直した。彼は、Marx の経済理論における使用価値と交換価値の対立を中心に据え、具体的なものと抽象的なものの関係を再解釈した。彼によれば、具体的なものは単に触れられる物体ではなく、相互に関連する要素の全体的な性質を持つ。抽象的なものも、単

なる概念や精神的構築物ではなく、より広い文脈での関係性を持つと考えられている。Hegel と Marx に従う「抽象から具体への上向」という考え方は、活動理論の中核を成しており、胚細胞モデルの発見プロセスやその後の実践における具体化プロセスを貫いている。

弁証法的思考は、経験的思考から区別される。経験的思考は、実際に見たり触れたりすることで得られる情報に基づいている。観察した事実やデータを集め、それらを比較・分類することで、一般的な理解やルールを作り出す。この方法は、科学実験や日常生活の中でよく用いられ、具体的な例から広い意味を見つけるのに役立つ。一方で、弁証法的思考は、相反するアイデアや状況を組み合わせ、新しい理解や解決策を見つける方法である。矛盾を契機として捉え、それをより大きな全体の一部として理解する。このプロセスは、個人や社会の成長における新しい段階への進化に重要な役割を果たす。

④モデルの階層論

Engeström は認識論的レベルから胚細胞を特定する試みを行っている。拡張的移行の道具として、スプリングボード、道具としてのモデル、ミクロコスモスの3つのタイプが挙げられるが、道具としてのモデルにおいては「媒介的人工物の認識論的レベル」をピラミッドモデルで描いた(図3)。あるタイプの道具は「何?」という問いに対して、他のタイプは「どうして」「なぜ?」という質問に適している。図式のピラミッドにおいて、最下層にはイメージ・プロトタイプがあり、その上に物語・ナラティブが配置されている。これらは特定の文脈に縛られた道具としてのモデルである。ピラミッドの頂点には胚細胞モデルが配置され、矛盾関係を単純な形で表現するこの一般モデルは、多様な分化の可能性を秘めているため、適応範囲が最も広い。

Engeström は、媒介的な人工物のアフォーダンス性が必ずしも決定的でないことを指摘している。金槌は一般に認識装置として用いられるが、それは釘を叩くべきかを認識するのを助けるためである。しかし、金槌は労働者の力の象徴として、モデルや、あるいはモデルを引き起こすサインとしても用いられることがある。筆者は、同じ人工物が異なる文脈で全く異なる認識論的レベルで

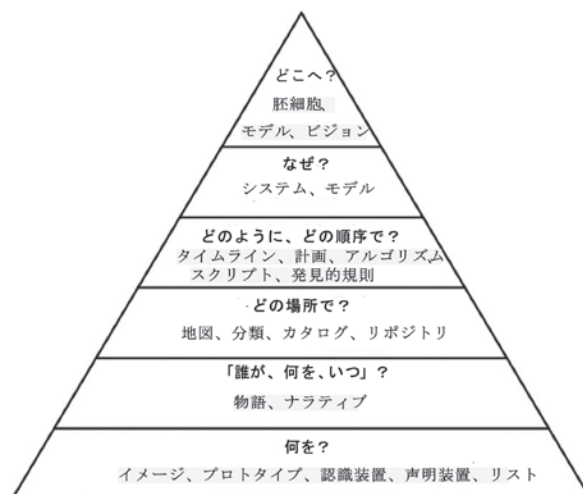


図3 媒介的人工物の認識論的レベル

(Y. Engeström (2016), “Studies in Expansive Learning”から引用し翻訳した)

使用されることを示すこの考え方が、胚細胞の同定作業において柔軟な想像力や自由な発想を活用する機会を提供すると考える。また、二重刺激法における第二の刺激に意味を与える際にも重要な示唆を提供していると考ええる。

⑤内的矛盾のレベル

Engeström は活動システム内の矛盾を4つのレベルに分類した。レベル1は、システムの各要素内部の基本的な矛盾。レベル2は、異なる要素間の矛盾。レベル3は、既存の形態と進化した形態の目標や動機間の矛盾。そしてレベル4は、主要な活動と周辺活動間の矛盾である。この分類は、実際の応用において重要であり、三角形モデルが静的なものではなく、動的で発展的なものであることを示す。三角形モデルの真価は、図式的な表現にあるのではなく、実際に使用される文脈における分析と新しい構築の中にある。

Engeström は、資本主義社会におけるプライマリケアを担う内科医の仕事を例に挙げて、矛盾の4つのレベルを示した。第一の矛盾は、使用価値と交換価値の矛盾として現れる。内科医は治療に医薬品を使用するが、これらは製薬会社が営利目的で製造した商品であり、医師は意思決定の中で板挟みになる。第二の矛盾は、伝統的な医学的診断の概念と複数の疾患を併せ持つ患者との間の葛藤である。伝統的な診断概念は、患者の問題や症状が多様化する中で適合しなくなっており、医学的・生物学的なアプローチと社会的・心理的なアプローチの対立を統合した新しいアプローチが求められる。第三の矛盾は、旧態依然の医療形態と新しい全体的統合医療の原理との間の葛藤である。病院の管理者が新しい統合医療を命じても、実践への移行は容易ではなく抵抗がある。第四の矛盾は、新しい全体的統合医療を提供する医師と旧態依然の健康行動を取る患者との間の葛藤である。医師が新しい習慣や考え方を提案しても、患者は抵抗することがある。このように、三角形の頂点内部の矛盾（医薬品の二重の性格）、頂点間の矛盾（複数の疾病を持つ対象の出現）、活動の旧来の形態と新たに出現した形態間の矛盾（病院組織内の考え方の相違）、中心的活動と隣接する活動の間の矛盾（健康の概念の相違）が具体的に描写されている。

3. 活動理論における胚細胞の典型例

活動理論における胚細胞の典型例をここで概観し、概念形成プロセスにおいて胚細胞がどのように抽象化され、モデル化されるかを精査する。活動理論の対象範囲は広く、小規模な組織のコンサルティングから、大規模な組織や複数の活動システム、さらには組織単位や国単位を超えるような多様でグローバルなものまで含まれる。具体例としては、第2世代と第3世代の在宅介護の介入研究、ヘルスセンターの医療スタイルの介入研究、そして第4世代のフィンランドのホームレス対策を取り上げる。また、Gregory Bateson によって統合失調症のコミュニケーション研究から導き出されたダブルバインド概念が、胚細胞として位置づけられることも確認したい。

3-1. 在宅ケアサービスにおける胚細胞：椅子から立ち上がる

フィンランドにおける高齢化社会の進展は人口動態に変化をもたらし、ケアの提供方法に影響を及ぼした。従来の施設でのケアから在宅ケアへの移行が進んだ。高齢者は孤独感や移動能力の喪失という問題に直面するリスクが高まり、これらが生活の質に重大な影響を与えていることが懸念された。2006年から2015年にかけてヘルシンキで実施された3つの長期的な介入研究プロジェクトは、高齢者の在宅ケアの質の向上を目的とした。これらの研究では、「椅子から立ち上がる」という胚

細胞的アイデアから「移動協定 (Mobility Agreement)」と呼ばれる合意文書がツールとしてモデル化され、体系的な身体的移動のエクササイズが在宅ケア現場に取り入れられた。この取り組みは、高齢者が自らの筋力を活用して移動する能力を支援し、自律性と生活の質の向上を目指すものである⁷⁾。

「椅子から立ち上がる」という行為は、持続可能な身体的移動性の基本的な要素であり、胚細胞として機能する。これは複雑な全体性の中で最初であり、最も小さく、最も単純な単位といえる。日常生活において、この行為は至る所に存在し、当たり前のこととして受け入れられているため、しばしば見落とされがちであった。しかし、このような単純な行動は、多くの応用可能性を秘めていて、在宅ケアの未来に向けたビジョンを提供する。

「椅子から立ち上がる」という行為は、安全性 (safety) と自律性 (autonomy) の矛盾関係を内包している。安全性は、高齢者が転倒するリスクを最小限に抑えることが目的であり、他人や家具に頼ることで安全に行動できるが、依存性を高めることになりかねない。自律性は、個人が自分の筋力を使って自発的に動くことを促し、自立性を高め、健康で活動的な生活へと繋がるが、転倒のリスクを伴う。したがって、安全性は短期的な安全を確保するために重要であり、自律性は長期的な自立と健康を促進するために不可欠である。両者のバランスが、高齢者の生活の質を向上させ、持続可能な移動性を実現する鍵となる (図4)。

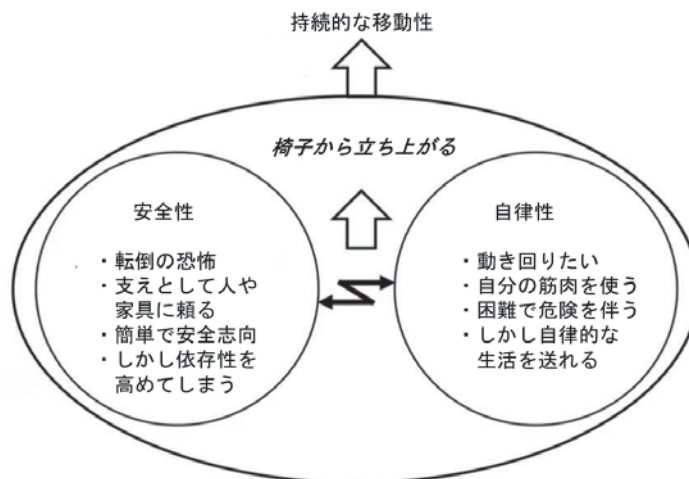


図4 それ自体が複雑な全体性の基本的な矛盾する関係を内包
(Y. Engeström (2024), “Expansive leaning in the workplace and its development over time” から引用し一部改変して翻訳した)

その後、移動協定の実施段階の検証研究が行われた。介護現場での経験をビデオ録画し、その分析により、クライアントとワーカーが拡張的か防衛的かの二軸に基づいて、4種類の学習サイクルのパターンが識別された⁸⁾。一方が拡張的で、他方が防衛的である場合、クライアントとワーカーのペアは互いに葛藤することになる。

人は習慣化して慣れ親しんでいるさまざまな前提を放棄し、新しいスタイルに移行することは、いつの場合も簡単なことではないことを諸家が指摘している。Sigmund Freud は精神分析技法に

において、防衛スタイルの分析が必要であること、新しいスタイルへの移行には常に逆行の動きもあり、仕上げるには徹底操作（working through）が必要であることを示した。また、Bateson は、習慣化され固定化された学習Ⅱは日々強化されてしまい、学習Ⅲへの移行は簡単ではないことを指摘した。

筆者はこうした認識からしても、新しいモデルの実施において防衛的な側面を軽視しない姿勢が必要であると考え。また、拡張的な効果と持続性の鍵となるのは、小さな成功体験の積み重ねによる自信に基づく動機の質転換と考える。クライアントとワーカーの双方にとって、移動協定が Leontief のいう「理解されただけの動機」にとどまるのか、リスクを取りながらアクティブでより自立的な生活という「主導的な動機」に向かうのが分岐点である。そもそも動機の対立は、二重刺激法における欲求状態からダブルバインドへと転換によって個人に体験され意味をもつ。抽象から具体への上向をダイナミックに作動させ、エージェンシーの活性化を促すためにも、動機の転換が重要といえよう。

3-2. ヘルスセンターの医療改革における胚細胞モデル：2本の患者パイプライン、コミュニティ・コンサルテーション

Engeström が協働構成（co-configuration）の取り組みとして挙げたケースである⁹⁾。フィンランドのエスポー市立ヘルスセンターで行われた医療実践に関するチェンジラボラトリーを用いた介入研究では、仕事の矛盾が質的に異なる2種類の患者ニーズに起因する混乱として表面化した。一方では、単一の病状を持つ患者のニーズに対して迅速かつ標準化された診療が適応されていた。他方、複数の疾患や複雑な社会的問題を抱える患者のニーズには、個別のアプローチと多くの時間が必要であった。

チェンジラボラトリーでは、2つの胚細胞モデルが見出された。一つは、主任内科医が提案した緊張関係を管理するための「2本の患者パイプライン」のモデル化である。一つのパイプラインは標準的なケースを処理し、もう一つは複雑なケースに特化する。この患者群を選別するビジョンは、モデルの認識論的レベルで「どこへ」に対応する胚細胞モデルといえる。もう一つは、介入者が提案した「コミュニティ・コンサルテーション」のモデルで、医療従事者と患者が協働して治療計画を作成し、必要に応じて他科の医師を含むネットワークミーティングで共同決定を行うものである。協働的対話のモチーフとして機能する「どこへ」としての胚細胞モデルが、「コミュニティ・コンサルテーション」の形でモデル化された。

複数の疾患や複雑な社会的問題を抱える患者の積極的な協力、ヘルスセンター全スタッフの積極的関与、外部リソースの活用を含む具体化プロセスの課題は、換言すれば治療プロセスを共同で計画し監視する方法の協働構成の学習である。これには、必要に応じて迅速に異なる種類の専門知識を組み合わせる能力の醸成と、三者が全体的な進行に対して持つ共同責任が求められる。これは三者が一緒になって最適なケア経路を作り上げるための対話と交渉を実現するノットワーキング（knot working）の形成の試みとなった。

3-3. フィンランドのホームレス対策における胚細胞：ハウジングファースト、エスコート・トランスファー

フィンランドで2008年から始まったハウジングファースト政策は、ヨーロッパの中で唯一ホームレスの数を大きく減らすことに成功した。FHF（フィンランド版のハウジングファースト）は、

無条件に住居を提供するものであり、それが市民生活を送るうえで依存症をはじめさまざまな問題を解決するための前提という考え方である。FHF と対照的なのが従来の伝統的なアプローチである「階段モデル」である。これは、ホームレスの人々がアルコールや薬物の使用を止めた後にのみ、住居が提供される方式である。しかし、住居や住所をもたない場合、依存症や他の問題を解決することは非常に難しい。

フィンランドでは、FHF の政策として、一時的な避難所を支援住宅ユニットや賃貸アパートに置き換えていった。その決定には、そうしなかった場合のホームレス対策の予算がより膨らむという財政的な試算があった。こうして、ハウジングファーストという胚細胞的アイデアが、FHF としてモデル化され実行されたことで、ホームレスの数を減らす成果につながった。

成功裏に進んだかに見えたフィンランドのホームレス問題であるが、近年新たな問題が発生した。ヘルシンキなどの都市部における若者や移民者のホームレスの増加である。その多くはアルコールや薬物依存、精神疾患、犯罪など多重要因を抱えていて、住居を用意し標準的な支援をする従来のやり方では効果がないことがわかった。

2019年度からフィンランドのホームレス対策は、ハウジングファースト2.0と呼ばれる新たな段階に入った¹⁰⁾。こうした新たな対象は、転居や複合的な支援へのアクセスや継続性の面で弱者といえる（図5）。こうした対象の支援現場で暗黙裡に行われていた「エスコート・トランスファー（escorted transfer）」という工夫は、野生の概念形成における胚細胞の発見と活用といえる。「エスコート・トランスファー」は、クライアントに寄り添って（同伴して）、必要なサービスへのスムーズな移動を支援することを指し、サービスシステムの隙間をなくすためのアイデアである。

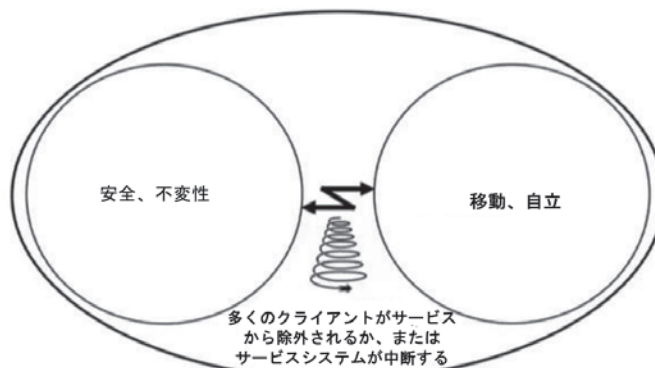


図5 永続性と流動性の新たな矛盾

(Y. Engeström (2024), “Expansive leaning in the workplace and its development over time” から引用し翻訳した)

タンペレのチェンジラボラトリーで行われた Sannino の介入研究¹¹⁾ により、2019年に胚細胞は、「エスコート・トランスファー協働合意文書（escorted transfer collaboration agreement）」としてモデル化され、「モバイル多職種サービス（mobile multiprofessional service）」として運用された（図6）。このサービスは、多くのクライアントがサービスの外側に取り残されたり、サービスシステムの隙間に落ち込んだり、中断に陥ったりする事態を防ぐものである。

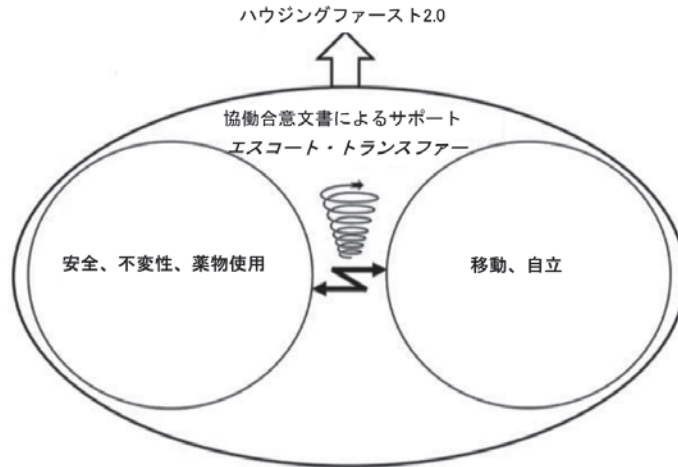


図6 ハウジングファースト2.0の新たな概念への胚細胞としてのエスコート・トランスファー
(Y. Engeström (2024), “Expansive learning in the workplace and its development over time”
から引用し翻訳した)

これは実際にユヴァスキュラ市で採用され、フィンランド語で速い脚を意味する「ノパヤルカ (Nopsajalka)」としてカスタマイズされた。この実行モデルは成功を収め、ハウジングファースト2.0における概念形成と実装が検証されたことになり、国際的にも注目されている。

3-4. Bateson の統合失調症研究における胚細胞：ダブルバインド

Engeström が拡張的学習の理論構築にあたってルーツとみなす研究者は6人いるが、そのうち5人の Vygotsky、Leontief、Ilyenkov、Vasily Davydov そして Mikhail Bakhtin は、旧ソビエト連邦の研究者、思想家そして活動家である。もう一人は例外的であり、イギリス出身でアメリカで活動した文化人類学者の Bateson である。

彼は、拡張的学習が Bateson の学習Ⅲの考え方に負っていると述べ、特別な評価を与えている。そして、Bateson の統合失調症を対象にした研究論文「統合失調症の理論化に向けて」の組み立てや理論構成について分析し、論理階型理論がブレークスルーを起こすためのアナロジー、すなわちスプリングボードとして機能したこと、ダブルバインドという新しいカテゴリーが胚細胞的なものであると分析した¹²⁾。

つまり、Bateson は統合失調症のコミュニケーションという対象を、ダブルバインドという胚細胞を見出すことで拡張したことになる。実際にダブルバインドモデルは、家族療法における従来の精神医学的な前提を覆し、大きく発展させただけでなく、心理学、人類学、遺伝学などさまざまな分野においてインパクトを与えている。

4. ウィリアムズ症候群とその家族の支援プロジェクトにおける胚細胞（試論）

以上の理論的背景やその応用例をもとに、筆者がウィリアムズの活動に部分的なかかわることで得られた情報や、文献によって知り得た活動内容から題材をピックアップして、活動の概念形成のプロセスにおける胚細胞を提示する試みを行う。そして、若干の理論的な考察を行うことで、今後の活動の指針の一端を提示できればと考える。

4-1. 総合研究所研究課題69における概念形成と胚細胞：図と地、覚識の連続体

総合研究所の研究課題69「ウィリアムズ症候群の視空間認知特性の研究―主として投影法心理検査を用いた解析―」を開始するにあたり、根津はこれまでの音楽キャンプの成果と共に、直面している課題を整理し、見直しの必要性を明確化した¹³⁾。成果としては、就学や就労に関する情報交流や表現活動を通じた参加者同士の交流を挙げた。課題としては主として視空間認知における言語能力と空間認知の乖離を挙げた。活動が比較的固定的なメンバー構成のため、乳幼児期から参加していたウィリアムズは学齢期を経て社会参加する年齢に達し、家族も高齢化してきた。ウィリアムズは、加齢に伴う精神神経面の問題や高血圧などの症状の進行を含め、生涯にわたる医療的、社会的介入が必要である。このような状況を踏まえ、社会に参加するウィリアムズへの支援方法の開発と、視覚的な課題や運動的な課題を含めた研究が求められた。研究課題69は、音楽キャンプのスタッフがこうした背景から感じとった緊張状態と問題意識から設定されたといえよう。

実は、上述の言語能力と空間認知の乖離といった視空間認知の背景には、図と地の知覚が未分化であることがすでに想定されていた。研究課題69で用いたロールシャッハテスト、ベンダーゲシュタルトテスト、風景構成法のバッテリーは、主としてゲシュタルト知覚のあり様を解析する点で優れている。風景構成法の結果では、共通してアイテムの羅列的な構成が見られ、遠近感や立体感が表現されなかった。構成学からの解析では、絵画発達段階で習得される3次元習得手法がほとんど使われていないことから、絵画表現における統合性の欠如と奥行知覚の困難が指摘された。こうして、実践知として見いだされていた図と地のアイデアは、心理テストによる視空間認知の解析によって裏付けられ豊富化されたといえる。その後の支援ツールの開発や支援の文脈の再定義における指針（「どこへ」的なビジョン）として機能したことを考えると胚細胞ということができる。その後「図と地」モデルはスタッフ間で共有され、支援のツールの創出やプログラムの案出プロセスで活用されている。

これと並行して、根津はアメリカの音楽療法家 Edith H. Boxill の研究から「覚識の連続体 (continuum of awareness)」という治療・支援的の枠組みを取り入れた。Boxill の対象は言語的コミュニケーションが困難な重度の自閉症スペクトラム症の人々であった。彼女は言葉ではなく音楽をツールとしたゲシュタルト療法的アプローチを実践し、「覚識の連続体」を図式化したのである。

「覚識の連続体」を胚細胞としてウィリアムズという異なる対象の支援に応用する試みから、ウィリアムズに適合するように改変された。ウィリアムズの場合、力点は「喚起する」から「高める」と「拡大する」へシフトした。こうして改変された「覚識の連続体」モデルの案出がなされた。つまり、ここまでの「抽象から具体への上向」前半段階である抽象化のプロセスである。このモデルがスタッフ間で共有され具体化へと進展する中で、ウィリアムズの課題は、知覚的、認知的な側面だけでなく、対人面、感情面にあることも明らかになった。これはウィリアムズの治療・支援空間における身体性や他者性の理解の重要性を示す。そのため、改変された「覚識の連続体」の実践では、行為ではなく身体性を帯びたパフォーマンスに力点が移行した。また覚識のレベルを高め拡大する実践の中で、パフォーマンスと内発的学習との連携強化の重要性が明確にされた¹⁴⁾。

4-2. 総合研究所研究課題76における概念形成と胚細胞：イクイティ

以上の流れを受けて、総合研究所研究課題76「ウィリアムズ症候群のための“支援プログラム”の開発～投影法心理検査を基盤として～」では支援プログラムの開発がテーマとなった。またウィリアムズの支援の力点が、仲間と「苦手なことを楽しく達成できる活動」から、「わかるから、心

地よくて楽しい活動」へと移行したこともこの時期の特徴である。それはループリックを用いた達成の評価に象徴されるような個人の能力の発達を促す方向性と、構造を理解した上で、できる／できない・うまい／下手という評価軸よりも音楽の風情を味わい、皆で楽しむことを重視する方向性の矛盾の弁証法的統合といえる。活動の目的は、ウィリアムズの特性の長所を生かした生活の質や社会性向上に主眼が移った。

三重大大学のグループは当初から、音楽、ものづくりと工学、保育教材開発など教育的観点を含んだ多様な支援ツールを手作りで進めてきた。日本女子大学のメンバーも支援ツール開発を開始した。このタイミングで、地理的に離れた両者のミーティングがZoomで行われた。支援ツールの開発思想を意見交換する中で、「イクイティ (equity)」という概念を胚細胞として抽出することができた。

イクイティは、全員が同じ出発点に立つことを意味し、ウィリアムズにとって取り組みやすい配慮につながる。例えば、描画ではなくちぎり絵が活動に選択された。ちぎり絵は、誰もが経験が少ないため皆が同じ出発点に立てる。またちぎり絵の独特の風情を味わい、共に楽しむことが可能になる。技術的差異がない点では、ラップやフラダンスも同様といえる。ラップのプロのきょうだいやフラダンスの指導者である母親以外は、皆経験が少なく同列である。

イクイティは、このように支援ツールの素材を選んだり、改良したりする際の重要な視点として機能する前提的モデルとなりうる。例えば和田は、ちぎり絵を改良してDie Cut技法を用いた新たなツールを創出し実践した。そしてやや難易度が高かったという反省から、重なり解釈の構造的複雑さを排除し、プレグナンツの法則に従った輪郭線を際立たせる工夫を凝らした。イクイティに沿って改良された支援ツールは、ウィリアムズにとってより優しく、楽しめるものに仕上がったといえる¹⁵⁾。

こうした経験は、家から離れてグループホームで生活したり、職業をもち始めたウィリアムズにとって、望ましい対人的環境の選択基準や形成において有用となりうる。

4-3. 総合研究所研究課題80における概念形成と胚細胞：アウトリーチ、選挙方式、ポリフォニー

総合研究所研究課題80「ウィリアムズ症候群の家族を対象とした生涯発達支援プログラムの構築」は、コロナ禍で実施された。感染症は音楽キャンプの形態にも影響を及ぼした。対面で一堂に会することができない状況の中、複数の活動場所を設け、オンラインでつなぐハイブリッド形式で実施したが、その継続の意義は非常に大きいものであった。一方で、それぞれの場所で行われる活動をリアルタイムで共有することの難しさや、コミュニケーションの限界も明らかになった。意思疎通の面での分断の危機が生じたことは否定できない。

2021年10月の音楽の森9のプレイベントで、根津はウィリアムズとその家族が生活する地を訪れた。そして地域の病院が提供した会場で、過去のキャンプの歴史を写真で振り返る活動を、オンラインでつながったキャンパーと共に実施した。この居住地への「アウトリーチ」の発想は、距離を縮める意味でコロナ禍のハンディキャップを克服し、絆を再確認することになった。そもそも本来は一堂に会して対面的交流が基本であるが、当時の三密回避の行動様式と矛盾することから、ウィリアムズの活動において分断として表面化し緊張状態をもたらしていた。ここでは、分断の危機を乗り越えるために、「アウトリーチ」が胚細胞として機能したと考えられる。つまり、関係修復と対話性をより重視する方向（「どこへ」としてのビジョン）への舵取りにつながったといえる。

音楽キャンプで恒例となっている家族主体のバーベキュー活動においても、この時期に不協和音

が生じ、緊張緩和が必要とされた。その中で、2023年8月のキャンプは3年ぶりにキャンパーが一堂に会する形式で行われ、バーベキューの具材選定において、これまでとは異なりウィリアムズの希望を聞く試みを行った。これにより、ウィリアムズの嗜好が反映されるだけでなく、バーベキュー当日の準備や後片付けを自主的に担う行動が育まれ、新たな分業とルールの変更がもたらされた。これに合わせて、音楽キャンプの活動におけるさまざまな選択機会に、「選挙方式」（投票箱を用意し、自分の意見を実際に投票する）を新たに導入しルール化した。直面する緊張状態から生み出されたこのモデルは、参加者全員の声を反映させるものであり、ポリフォニー的な対話の先鋒的活動（Spearhead activity）とも考えられる。選挙方式の導入は、社会人となったウィリアムズにとって、民主的な感覚が実体験できるとともに、社会性の象徴である選挙権の行使モデルとなったといえるのではないかな。

2023年8月の音楽キャンプのプログラムに、スージー・リー作『なみ』を用いた「世界でひとつだけの音絵本づくり」がある。家族の枠を超えたメンバーで行われた製作過程での「対話の構造」は次のようにカテゴライズされた。①他者との対話、②絵本との対話、③自己内対話。とくに自己内対話では、過去の自分やこうありたい自分への覚識が強化されるとともに、内発的動機づけが促進された¹⁶⁾。

これは最近の活動が対話による創造性や関係性の進化に焦点づけされていることを明確に示している。このような移行を推進した根津の着想の背景には、Bakhtin のポリフォニー論がある。Bakhtin は音楽領域のポリフォニーやオーケストレーションといった用語をメタファーとして対話論に借用した。そこでは、すべての個人の考えが反映されるような対等な立場での対話が強調された。このような胚細胞的な「ポリフォニー」は未来志向であり、参加者の多様性や多層性に由来する階層構造の内的矛盾を含む。そこには、ウィリアムズの音楽キャンプのキャンパーの関係性の歴史的自省に基づく思考が込められていると推測できる。

2023年8月の音楽キャンプ期間中に参加した3人のきょうだい児を対象に、安藤らがインタビューを行った。総合研究所の研究課題80では、生涯発達支援の中のテーマの一つがきょうだい児であった。導入場面でインタビューワーは、「皆さんがよりよく生活できるように少しお手伝いしたい」と幾度となく伝えていた。3人のきょうだいたちは、それを受けて率直に質問に答えていたことが印象的であった。これらの貴重な声を活動全体のポリフォニーの中にどのように布置してゆくかが今後の課題といえる。

インタビュー記録において、3人のきょうだい児から発せられたキーワードから、今後の音楽キャンプの活動やコミュニティをデザインする上で基盤となりうる胚細胞候補をいくつか見いだすことができる¹⁷⁾。きょうだい児の発話に含まれる関係性は、ウィリアムズの兄だけでなく、親、他の家族のウィリアムズやきょうだい児、そしてキャンプのスタッフまでを包括している。こうした全方位的な視野をもった関係性であるがゆえに、胚細胞候補になりうる。またここでの胚細胞候補が含意するのは、今後の展開の中でいずれかのモチーフを起点にビジョンやプログラムの具体的な生成がなされるという意味においてである。以下胚細胞候補を挙げる。

一つ目は、参加動機の二重構造の意識化と肯定的意味づけに関してである。あるきょうだい児は、年1回のキャンプへの参加動機について、「見せかけて・ふりをして実は自分達が楽しんでいる」と表現した。これは本音と建て前という対立軸をポジティブな次元に変換し活用しているといえる。このモチーフには、ウィリアムズ、親、きょうだい、そしてスタッフといった多様なメンバーの立場や活動へのスタンスの違いを乗り越える潜在性を感じる。今後のより相応しいコミュニティ

形成のあり方を示唆するアイデアになるかも知れない。二つ目は、「気負わず自然体」を貫く姿勢である。きょうだいはウィリアムズの兄のことを尊敬し、普通の兄として接していて、特別なこと（支援的な意味で）は何もしていないと語る。そこには障害について問題が見えている／見えていないという次元を超越したきょうだい関係が想像できる。「気負わず、自然体」は、コミュニティ形成と持続性にとって有用な胚細胞候補ではないかと考える。三つ目は、家族の文化特性に言及した発言である。音楽キャンプに参加し続けているウィリアムズやきょうだいは、教育やしつけの方針が共通であるという認識をもっていた。具体的には「ダメなものはダメと教えるし、挑戦もさせる」というチャレンジ精神である。

きょうだい児同士の交流を活発化させている背景に、風グループというきょうだいを単位とした活動のカテゴリーの存在がある。風グループの活動は「やってもやらなくてもいい気軽さが居心地良い」のである。他の家族のきょうだいとの関係性について「自分の心に嘘つかない」、「みんな心開き合っている」、「親よりきょうだいの方が話しやすい」、「絡みやすい」、「遊びやすい」、「ガンガン行く」、「スキンシップ」など多くが三者三様に語られていた。また共通項である「もっと楽しむ」、「仲を深める」という価値観も、コミュニティ形成における胚細胞候補として有力ではないかと考える。

2019年に活動モデルを「たのくるしい」から「ここたのしい=わかるから心地よくて楽しい」へと再定義したことで相まって、この風グループというプラットフォームの安定性を保障することが肝要であろう。今後もきょうだい同士の交流を促し、活動への参加意欲を高めることにつながるのではないかと。

5. おわりに―試論の位置づけと今後の課題―

ウィリアムズの活動における概念形成のプロセスを辿りながら、いくつかの胚細胞とそのモデル化、または胚細胞候補となるモチーフを提示した。これらは、ウィリアムズの活動という現場実践の中で、集団的に創造された文化的に新しい概念形成という意味で、野生の概念形成そのものといえそうである。時間軸に沿って見いだされて活用されるあり様を俯瞰すると、これらの一つ一つの胚細胞モデルは相互に関連し、さながら職人の洗練された道具箱のように、パッケージとして活動全体の中に溶け込んでいるように感じる。これは活動理論という「動的なマルチレベルの概念的道具の構築と使用」に符合するかも知れない。そして、活動の中で相互に関係しながら用いられることで、新たな次元（メタファーとしての奥行き）を生み出していると考える。

総合研究所の研究課題86「ウィリアムズ症候群の患児・者の社会参加支援プログラムの開発」が4月からスタートしており、そのときどきに直面する課題に対するプログラムのデザインにおいても、概念形成のプロセス理解と胚細胞の発見が意味をもつと考える。

ウィリアムズの活動における胚細胞研究の今後の課題として、図5（内在する矛盾とそれによる課題の可視化）、図6（矛盾の解決としての胚細胞とそのモデル化の可視化）のような究極に洗練された形での図式化に向けた作業が残されている。そうした意味で、本稿をそれへ向けての予備的な試みと位置づけたい。

謝辞

学会員に最新の文献や情報を届けてくださる活動理論学会の主宰者・山住勝広先生にこの場をお借りして感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 根津知佳子、和田直人、甲斐聖子、安藤朗子、吉澤一弥「研究課題 80ウィリアムズ症候群の家族を対象とした生涯発達支援プログラムの構築」『総合研究所発表会』（日本女子大学、2023年11月）、8-10頁。
https://mcm-www.jwu.ac.jp/~sogoken/publication/report/jwu_sogoken_report_80.pdf（2024年6月10日閲覧）
- 2) Y. Engeström、山住勝広訳『拡張による学習—発達研究への活動理論からのアプローチ 完訳増補版』（新曜社、2020年）、ii 頁。
- 3) 前掲書、300頁。
- 4) Yrjö Engeström, “Concept formation in the wild: towards a research agenda”, *Open edition journals*, 2020.7. pp.110-111. <https://journals.openedition.org/educationdidactique/6816>（2024年6月10日閲覧）
- 5) Y. Engeström、山住勝広訳（2020）前掲書。
- 6) Y. Engestroem、山住勝広監訳『拡張的学習の挑戦と可能性—いまだここにはないものを学ぶ』（新曜社、2018年）
- 7) J. Nummijoki & Y. Engeström, “Towards co-configuration in home care of the elderly: Cultivating agency by designing and implementing the Mobility Agreement” *Activity theory in practice: Promoting learning across boundaries and agencies*, Routledge, 2009.6. pp.51-55.
- 8) J. Nummijoki, Y. Engeström & A. Sannino, “Defensive and Expansive Cycles of Learning: A Study of Home Care Encounters” *Journal of the Learning Sciences Volume 27- Issue 2.*, Taylor and Francis, 2018.1. pp.235.
- 9) Y. Engeström、山住勝広監訳（2018）前掲書、87-92頁。
- 10) Y. Engeström, “Expansive leaning in the workplace and its development over time”, *WILCHAT seminar at CAT*, 2024.1. https://hvplay.hv.se/media/t/0_0mu29gee（2024年6月10日閲覧）
- 11) Annalisa Sannino, Yrjö Engeström, Emma Kärki “Multiprofessional mobile support for overcoming homelessness: A study of Nopsajalka work in Jyväskylä” *RESET*, Faculty of Education and Culture Tampere University, 2023.2. pp.31-32.
- 12) Y. Engeström、山住勝広訳（2020）前掲書、54頁。
- 13) 吉澤一弥、根津知佳子、和田直人「ウィリアムズ症候群の視空間認知特性の研究—主として投影法心理検査を用いた解析—」『日本女子大学総合研究所紀要』23巻（日本女子大学総合研究所、2021年3月）、148頁。
- 14) 根津知佳子、吉澤一弥、和田直人、角藤比呂志「ウィリアムズ症候群の視空間認知とパフォーマンス」『日本芸術療法学会会誌』51巻2号（日本芸術療法学会、2021年3月）、51頁。
- 15) 根津知佳子、和田直人、安藤朗子、甲斐聖子、吉澤一弥「ウィリアムズ症候群における「図と地」の多角的検討」『日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科』29巻、（日本女子大学、2023年3月）、268頁。
- 16) 根津知佳子、安藤朗子、甲斐聖子、和田直人、吉澤一弥「創造的音楽活動に内在する対話の多層性」『日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科』30巻（日本女子大学、2024年3月）、128頁。
- 17) 根津知佳子、和田直人、甲斐聖子、安藤朗子、吉澤一弥（2023）前掲論文、8-10頁。

Ⅵ 実践複合体としての音楽キャンプの可能性と課題

根津知佳子・吉澤 一弥

米国やアイルランドで行われている音楽キャンプの「場（トポス）¹⁾」には、野外活動に象徴されるような「自然な場所」としての性格と、安全で安心できる場であるという「ものをそのうちに含む容器」としての性格が内在している。

我が国の音楽キャンプは、高江洲（2004）の「治療複合体（Therapeutic Complex）」に依拠し「実践複合体（Practical Complex）」（図1）として位置づけているが、そこで重視されるのが非臨床職を含めたスタッフの嗜好、性格傾向、能力などの影響を受ける対人間の「問合い感覚」である²⁾。高江洲（2004）によれば「治療共同体（Therapeutic Community）」と異なる相互作用は次の①～③である³⁾。

- ①治療複合体としての自覚（コンプレックス）
- ②患者と治療者の同一性（アイデンティティ）
- ③治療複合体としての連携（エコロジー）

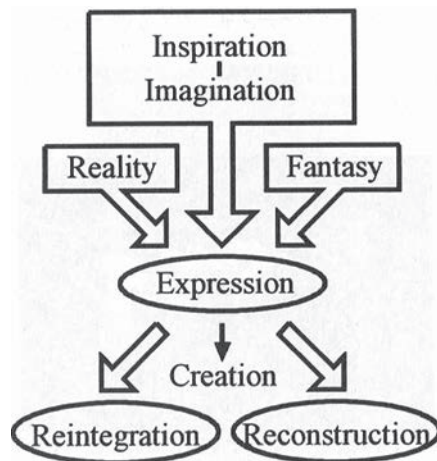


図1 実践複合体（根津2006）

根津・下垣・榊ら（2006）は、『ホイサー』という身体性を帯びたパフォーマンス課題に対して参加者全員が同一の方向性（アイデンティティ）を持つときに、音楽的場が「Fantasy（ファンタジー）」の場になり、ウィリアムズの言語能力とその特性が「Reality（現実）」と「Fantasy」の融合に作用し、独自の「Inspiration（着想）」「Imagination（想像）」が引き出されることを報告した。また、根津・後藤・川見（2016）でも身体性を帯びた『歌舞伎ダンス』のパフォーマンス課題について「Expression（表現）」から「Creation（創造）」のプロセスに焦点を当て、動作（所作）を可視化するパフォーマンス評価を開発した⁴⁾。

しかし、両者ともウィリアムズの不得手な活動であったために、内発的動機が循環するような活動としては課題が残ったことは事実である。

前者は第1期の活動であり、後者は第2期の活動であったが、このような問題意識が研究課題69、76、80の背景となっている。すでに報告しているように、研究課題76では、ボクシルの「覚識の連続体」を基盤としたオリジナルのモデル（図2）を創出することができた⁵⁾。

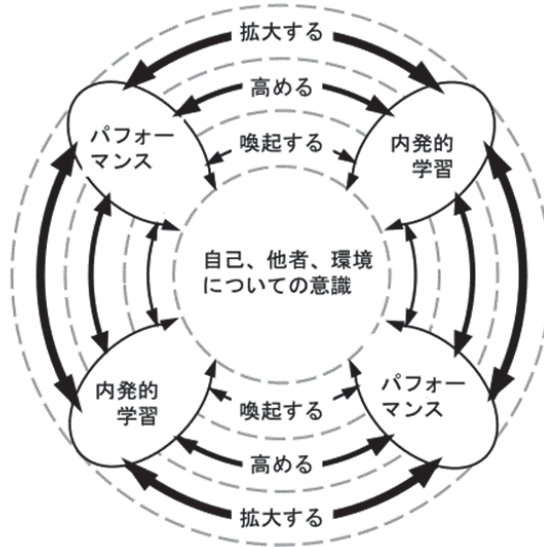


図2 ウィリアムズのための「覚識の連続体」
(Boxill, 1985, p.234、林・稲田、2003、p.276を筆者らが改訂)

このモデル図を活用するならば、『ホイサー』も『歌舞伎ダンス』も「内発的学習」を「喚起する」「高める」レベルの循環を促す手立てがなかったことになる。しかし、IVにおける甲斐による報告では、『なみ』を介した創造的活動によって、参加者全体が「内発的学習」を「喚起する」「高める」「拡大する」を循環させていたことがわかる。それは、絵本『なみ』に内在する文化財としての質に起因するものであるだけでなく、運動性を伴った『なみ』という素材による創造的音楽活動という形態によるものと考えることができる。

根津ら（2024）が報告したように、この運動性を伴った活動が参加者の無意識レベルを賦活したことは、Dさんの【お母さんの声が表現できないD】【力を抜いていくD】【やさしく、やわらかい母親としてのD】のエピソードに象徴されている⁶⁾。以下、エピソードの要約を示す。

Dは、絵本『なみ』のお母さんの声が怖くてやさしくなかったことについて周りの人たちからアドバイスをもらっても、声色が変わらず、絵本のお母さんの表情を見て、目に涙を浮かべ、困ったかのように鉛筆で何かを書こうとした。スタッフが、Dの肩をもみ、「リラックス～」と言うと、Dは、少し表情がやわらぎ、周りもDを応援する雰囲気になった。

女の子と手をつないで帰る場面では、その声はやわらかくてやさしかったことから、この表現によってDは、これまでに体験したことのない自己認識や自己理解を深め、自分の潜在力や

個性を発見できた。

根津ら（2024）は、このエピソードについて、絵本『なみ』が波の規則性と揺らぎ、そして音の繰り返しという運動性を内在していることから Perls, F. S. (1971) や Boxill, E. H. が言及する「意識の連続体（Continuum of awareness）」の感覚運動につながるものであると解釈した。

さらに吉澤は、Fichtner, B. の理論から解釈を加え、調整・協働水準・内省的コミュニケーションの3つの水準のうち、Dさんは第2の水準であるとし、次の段階の内省的コミュニケーションを展望している。

第二の水準「協業」と第三の水準「内省的コミュニケーション」は、固定的なものではなく、発達の過程で行き来しながら、最終的には第三の水準が優勢になるという動的なものである。Dさんが現在は協業の段階が優勢であったが、部分的には内省的コミュニケーションも垣間見れた。この過程は非線形であり、時には以前の段階に戻ることもあるが、経験と学びを積み重ねることで内省的コミュニケーションが優位となり、Dさんはますます自己の潜在力を発見し育てることができると考えられる。このような発達は、個人の成長において重要なステップであり、集団内での役割や貢献にも影響を与える。また、このプロセスは、個人が自己の感情や思考を他者と共有し、共感や理解を得るための重要な手段となる。このような対話のプロセスは、個人だけでなく、集団全体の成長と発展にも寄与するといえる。

ところで、近年のウィリアムズ症候群と音楽の関係に関する論考も多岐にわたっている。Donovon Thakur ら（2018）は、2017年以前に発刊されたウィリアムズ症候群と音楽との関係を論じた英文の査読論文31件について体系的な統合レビューを行い、その研究領域を「音楽性」「音楽的技能」「感情的な反応」「音楽のプロセス」「脳のイメージと形態」「認知プロセス」「恐れや心配、問題行動」の7領域に分類している⁷⁾。特に「恐れや心配、問題行動」に属する研究領域には、人前でのパフォーマンスや聴覚過敏に関連する不安など、ウィリアムズ症候群の社交性や音楽性に関する幅輻した課題が挙げられている。近年のウィリアムズに関する内外の研究は、専門性の高い研究領域における高度な情報を提供しているが、それが教育や療育に必ずしも結びついているとは言えない。

研究課題69におけるロールシャッハテストにおいても、被検者の防衛が現れ、従前の研究で声高に言われていた社交性やその言語性の高さを発揮することはなかった。これは、成人期のウィリアムズの支援を検討する際に、精神医学による視座が不可欠であることを示唆するものである。

2001年度のプレキャンプに参加した中学2年生のSさんは『天使たちのナイジェリア』というタイトルの作品を披露し「教会で恋人たちがお祈りをしている」「ここは天使が空に上がっていくところ…」と語りながらピアノを演奏してくれた⁸⁾。Sさんのピアノの演奏技術（指使い）は自己流であるものの音楽作品として誰とでも共有可能なものである。I章でも述べたが、Sさんの事例は、器楽に関しての一定以上の技能や暗黙知があれば、豊かな創造的活動を展開することが可能であることを示唆している。一方、Sさんの興味・関心が思春期特有の異性に対するものであることを踏まえるならば、その創造性を支えているものはSさんが意識することのできない領域ではないかと推察することができる。

根津・吉澤（2001）は、空想が創造的になるか病的になるかは個人によるとするクライン学派が、無意識的空想を表す「phantasy」と意識的な白日夢やフィクション、芸術的・詩的な奔放を表す「fantasy」とを区別している点に着目している⁹⁾。音楽療法家のLeslie Bunt（1996）によれば、ク

ライン学派の概念では、音楽や音楽活動が抗しがたい力から自己を守る一つの防衛機制となる¹⁰⁾。

この観点から捉えると、Sさんのピアノ演奏は彼女の無意識の領域、すなわち「phantasy」から生まれていると考えられる。彼女の語りを伴った『天使たちのナイジェリア』は、彼女の無意識内容が具現化されたものであり、彼女が意識的には捉えきれない深い感情や願望を反映している。思春期の異性への関心は、彼女の創造性の源泉の一つであり、彼女の音楽に対する自己流のアプローチや演奏技術は、彼女が無意識の領域で独自の創造的表現を見つけ出していることを示している。Sさんの無意識の中にある異性への関心やそれに関連する感情やファンタジーが、ピアノ演奏という形で外に表出されている事実は、Sさん自身にとって新たな発見や自己理解をもたらし、彼女の個性や潜在力を探る手がかりとなったことを示す。Sさんの創造的活動は今後も進化し続け、彼女の音楽はより深みを増し、聴く人に感動を与える作品へと成長していくだろう。

また、先に挙げたDさんの変化のエピソードを「phantasy」の観点から解釈する。クライン学派の理論では、「phantasy」は無意識の広大な領域を表すファンタジーを意味し、夢や日中のあらゆる想像的表現や創造的な活動を包括する。この理論に基づけば、Dさんが運動性を伴った絵本『なみ』の活動のエピソードで体験した新たな感情や表現は、無意識の深層から湧き上がる「phantasy」の現れと解釈できる。このDさんの経験は、無意識の中に存在する様々な感情や願望が、外界との相互作用を通じて意識化され、新たな自己認識につながる過程を示している。絵本のお母さんの声を怖くてやさしくないものとして表現したことは、Dさんの内面にある不安や恐れを反映していた。しかしスタッフのサポートにより、絵本の女の子と手をつなぐ場面にやさしい声で表現できたことは、Dさんが無意識の中に隠されていた温かみややさしさといった感情を今ここで意識化し表現することを可能にしたと考えられる。したがって、Dさんの劇的な変化は、無意識の「phantasy」が具体的な経験や活動を通じて意識化され、自己の感情や個性を探索し、再発見する過程を表しているといえる。

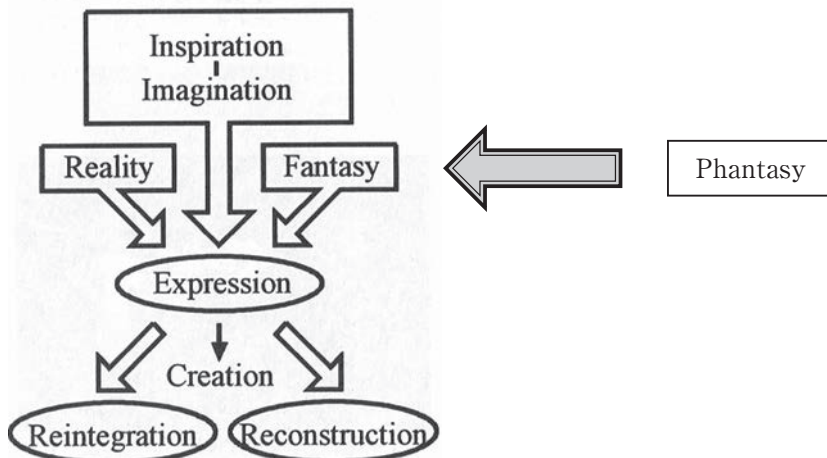


図3 本研究が提出する新たな実践複合体

「fantasy」と「phantasy」の関係は、実践複合体のモデルにおいて、意識的な芸術的表現が無意

識のファンタジーを基盤として展開されるという構造を持っていると位置づけることができる。ここでの「phantasy」は無意識の広大な領域であり、個人の内面に根ざした原初的なイメージや感情の源泉である。一方、「fantasy」はこの「phantasy」に由来するイメージや感情が意識化され、より組織化された形で表現されるものである。

芸術的な要素を含む創造活動においては、この二つの概念が相互に影響を及ぼしながら、表現や作品に深みと多様性を与える。無意識の「phantasy」が提供する豊かな素材は、意識的な「fantasy」を通じて、形や色、音、言葉、身振りといった具体的な表現に変換される。このプロセスは、個人の内面的な世界を外部に向けて表現するための重要な手段となり、観る者や聴く者に深い共感や感動を呼び起こすことができる。

したがって、実践複合体のモデルにおいては、「fantasy」は「phantasy」を母体にしつつ、その上に展開される意識的な芸術的奔放と位置づけることが可能である。このモデルは、芸術家が自己の内面を探求し、それを通じて新たな創造性を発見する過程を理解するのに役立つ。

参考・引用文献

- 1) 中村雄二郎 (1984)『術語集一気になることば一』岩波新書276 141-146頁。
- 2) 根津知佳子・下垣温子・榊眸・圓道衣舞・安部剛・松本金矢 (2006)「実践複合体としての音楽的場～Williams Syndrome の芸術プログラムにおける『ホイサー』の事例から～」『音楽心理学音楽療法研究年報』第34巻 23-30頁。
- 3) 高江洲義英 (2004)「絵画療法：その現状と課題」『精神療法』第31巻 第6号 19-24頁。
- 4) 根津知佳子・後藤洋子・川見夕貴 (2016)「Williams Syndrome の Performance に関する研究～歌舞伎ダンスの創出を通して～」『日本音楽療法学会東海支部研究紀要』第5巻 39-46頁。
- 5) 根津知佳子・吉澤一弥・和田直人・角藤比呂志 (2021)「ウィリアムズ症候群の視空間認知とパフォーマンス」『日本芸術療法学会誌』第51号 2 (日本芸術療法学会 2021年3月) 44-53頁。
- 6) 根津知佳子・安藤朗子・甲斐聖子・和田直人・吉澤一弥 (2024)「創造的音楽活動に内在する対話の多層性」『日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科』第30号 127-137頁。
- 7) Donovan Thakur, Marilee A. Martens, David S. Smith, and Ed Roth (2018). *Williams Syndrome and Music: A Systematic Integrative Review*. *Frontiers in Psychology*. Vol. 9.
- 8) 根津知佳子 (2005)「音楽で考え“創る”こと」『大学教育学部向け知的財産教育研究調査報告書』第3巻3号 1-12頁。
- 9) 根津知佳子・吉澤一弥 (2001)「心身医学領域における音楽表現行為の意義～潰瘍性大腸炎患者のための音楽療法試案～」『音楽心理学音楽療法研究年報』第30巻 11-18頁。
- 10) レスリー・バント・稲田雅美 訳 (1996)『音楽療法：ことばを超えた対話』ミネルバ書房 49-63頁。